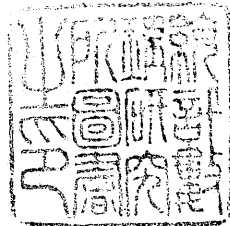


T 02
N 69
45

# 日本における統計学の発展

## 第 45 卷

話 し 手	後 藤 正 夫
聞 き 手	三 渚 信 邦
	奥 野 定 通



1981年1月31日(土), 2月5日(木)

参議院議員会館にて

19/12  
26033

26033

## ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。  
江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀨信邦\*、森博美\*、山元周行 (\* 推進係)
- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

## 戦争調査会のころ

奥野 21年の初めに宮城県へ行かれてから統計基準局長をおやめになるまで、一貫して統計に従事されて21年半と計算しました。宮城県が3年半、統計委員会の課長時代が9年半、それから、基準局長が8年半。

後藤 私にとって、やっぱり統計が一番長いですね。

奥野 そのスタートが「一統計人の手記」にちょっとお書きになった戦争調査会のころのことですね。山中さんとの関係、川島孝彦さんのお話をお聞きになったこと、あの辺のところを思い出す限り、お話しいただきたいのです。だれもその辺のことを述べておりませんので。

後藤 私は終戦までは内閣の技術院という役所で参技官というポストにあったんです。一番偉い参技官は勅任参技官だった、現在東海大学総長の松前重義氏。私は今日東海大学教授ですけれども、その松前さんが勅任参技官で、私は高等官7等、高等官の一番下で、そのまま終戦になったわけです。

三渚 これは内閣直属ですか。

後藤 そうです。

三渚 フルネームは？

後藤 内閣技術院参技官。

三渚 いつごろですか。

後藤 私が参技官になったのは、昭和19年の5月から終戦までです。三菱鉦業を退職したのはその1年前で、1年間は技術院の高等官待遇の嘱託でした。

三渚 技術院はいつごろできたんですか。

後藤 技術院は昭和17年だったと思います。技術院は、戦争が終わるとすぐに廃庁。総裁の多田禮吉陸軍中將が戦犯を出すことを心配して、いち早く技術院をなくすことを決めたのです。それが、私が宮城県に千葉三郎さんの秘書課長で行く1つの動機になりました。

やめることになった技術院の中に、戦争をやめることに反対するグループがあって、マッカーサーが厚木から東京に入る途中で、本土決戦用につくった無反動ロケット砲を使って襲撃する計画があった。そのグループの連中を私はよく知っていて、私も誘われました。

三猪 軍人の……？

後藤 いや、軍人ではありません。H氏という首相官邸の隣にあった戦力計算室の室長をしていた人がリーダーでした。戦力生産のために投入する資材、資金、労力等のインプットと生産との関係を計算して表にする、いわゆるインプットアウトプットの表をつくっていた人でした。いまから考えれば、レオンティエフの考え方と共通しているものでした。

このマッカーサー襲撃の計画は、技術院次長の千葉三郎先生のカで抑えることができました。

終戦直後にこのことがあって、千葉さんが私に関心を持ってくださるようになりました。戦争が終わって1か月ぐらいたったとき、突然千葉さんが私のところへ来られて、「いま宮城県知事を引き受けてきた。君は官房秘書課長として一緒に来てくれないか」といわれて、宮城県へ行くことになり、知事としての千葉さんの命令で、私は統計の仕事をすることになりました。

三猪 宮城県とは全然関係はない。



後藤 千葉先生も私もともにそれまで宮城県とは全然縁はなくて、千葉三郎先生が最後の官選知事として宮城県に行かれることになったのです。千葉知事から官房秘書課長の辞令をいただくときに、「君、統計を知っていますか」と聞かれたので、私は、三菱に勤務しながら専修大学の経済学部で夜間部で道家清一郎先生の統計学の講義を聞いたことがあり、統計が大事なことは知っていたので、千葉知事に「少しは知っているけれども、私は統計は大嫌いです」といったら、「君、これからは統計がなければ仕事ができないようになる。きょうから心を入れかえて統計をやってくれ」といわれて、統計に両足を突っ込むことになりました。

三渚 技術院というのは企画院とは別ですか。

後藤 全然別。

三渚 人的にも企画院から来た人というようなことはない？

後藤 人的には企画院の科学部から移った人が少しいたかもしれませんが。私は三菱やめて技術院に入りました。

三渚 三菱のことをもう少し詳しく……。

後藤 三菱鉱業。いまの三菱金属鉱業の前身です。学校を出てすぐ、三菱鉱業の技師として、ニッケルとコバルトの精錬の研究の仕事やっていました。そして昭和18年の春、技術院の事務嘱託で、企画院の中にあつた調査研究連盟研究局に出向して、技術院との連絡の仕事をやりました。そのときに調査研究連盟の研究局長は、日本曹達という会社をつくった中野有礼さんでした。その仕事が終わってから内閣技術院参技官に任官したのでした。

そして技術院が廃庁されると、内閣調査局調査官とな

り、さらに戦争調査会事務局に移ったわけです。そのときに戦争調査会に橋本龍太郎さんのお父さんの橋本龍伍さん。それから佐々木義武さんもおられました。もう一人、後に人事院事務総長をされた方もおられました。

そのころ私は初めて山中四郎さんのお名前を、佐々木さんや橋本さんからたびたび伺ったんです。日本のこれからの再建は、統計が非常に重要になる、したかつてみんなで統計の再建のことについて検討しようじゃないか。

戦争調査会では、戦争調査会が一体何をやるのかということで議論が2つに分かれたんです。それは、戦争に負けた責任を調査するのか、戦争を始めた責任を調査するのかと議論が2つに割れてしまっていて結論出ないんです。そのうちGHQの命令で廃止になった。また、初めは大東亜戦争調査会とっていたんだけど、大東亜という言葉を使ってはいけないということになって戦争調査会になった。

戦争調査会は、川島統計局長をお招きして、統計の重要性について勉強会をやりました。その少し後に、顔じやうに白い包帯を巻いた山中さんが事務所においてになりました。あの姿、本当に涙が出ましたね。原爆で相当ひどい被害を受けておられましたか、山中さんを囲んで統計の再建について話をしたのです。

奥野 そのときの調査会の調査官ですね。

後藤 そう、調査官です。

奥野 非常に多くはなくて、十何名かですか。

後藤 そんなに多くなかったと思いますね。あッ、もう一人はね増子さん。増子宏さん。その後私宮城県にいたときに、経済安定本部の労働局に出てこいという話があ

ったんですよ。片山内閣のときで、労働省の労働局長が私の友人で、労働総同盟から労働省入りをした渡辺年之助という人で、私にゼビ課長で、安本の労働局に來いという話があったんですけども、実現しなかったんです。本方の局長にするのは早過ぎるということだったらしいです。稲葉秀三先生がそのころ、安本においてになったと思います。

横道に入って悪いんですけども、それより前に、労働総同盟に技術局をつくるから、その局長として労働総同盟に來ないかといわれたことがありました。

奥野 すると、調査会にいらして、それから宮城県……？

後藤 宮城県に移るためには内閣から内務省に身分を移す必要がありましたか、その手続に時間かかったんです。その間内閣調査局から戦争調査会に行った。

奥野 内閣調査室でしょう？

後藤 いや、当時はまだ内閣調査局があって、内閣調査局調査官でした。

戦争調査会で山中さんに初めてお目にかかったのですが、個人的なつき合いは全然なかったわけです。

奥野 履歴拝見しますと、1月18日に宮城県に発令になっていきますね。ですから川島さんのレクチャーがあってほどなく宮城県の方へ……？

後藤 ほどなくです。

奥野 そのほどなくの間に山中さんがあらわれたわけですね。

後藤 そうなんです。

奥野 包帯姿で……。

後藤 包帯してお見えになられたんです。

## 宮城県調査課長のころ

奥野　そして向こうへ行かれたら、全く偶然に統計の仕事をやれといわれたわけですか。

後藤　千葉先生からいきなり「統計をたくさんつくれ」といわれました。そして「秘書的な仕事は、自分が私設秘書をたくさん連れていくから、君がやる必要ない。統計がないために知事として仕事ができないんで困っている」ということで、2月1日付で内務部調査課ができて、内務部調査課長兼務。

奥野　秘書課長が兼務ですか。調査課長本務ですか。

後藤　そのとき、調査課長本務で秘書課長兼務に、逆になったんです。

奥野　このとき逆になったんですか。

後藤　最初は秘書課長本務だったのが逆になった。というのは、内務部長というのなかなかごつい人で、どうしても私を自分の傘下に置きたいということで、結局調査課長本務になった。

それで、統計の再建の仕事をやり始めましたが、最初は、調査課は15人でスタートして、一年半ぐらいの間に調査課の人員はどんどん増員して105名にふえました。

総理府の統計委員会から人件費の委託費がふえ、定員増を強く求められたのでどんどん採用したわけです。いわゆる外地からの引き揚げてきた人や、復員した人が多かったのです。105名の課というのは、1つの部に相当するぐらいの人員ですから、各課の対抗の競技では何をやっても優勝。それはとっても楽しかったです。

奥野 空き地も多かったですね。

後藤 ええ、そうなんです。

奥野 そうすると調査課長、統計が本務だったんですね。

後藤 統計本務です。統計のことに非常に力を入れるという県会議員もいたのです。それで1年以上たって、千葉先生が民選知事に当選をしたときに、県議会での質疑で、後藤を一体調査課長として使うのか秘書課長として使うのかはつきりせよということを知事に迫った議員がいました。知事は私を呼んで、「秘書課長か調査課長かどちらかの専任にしたいから希望をいえ」といわれました。千葉知事は、私が秘書課長専任を希望するだろうと思っておられたらしいですけれども、私は調査課の方を選びました。「経済白書」をつくる仕事や何かやったわけですね。その「経済白書」は、私にとって生涯の思い出になっていると思います。

奥野 県の「白書」ですね。

後藤 ええ。県の「白書」を、安定本部の日本政府中央の「経済白書」より半年おくれて出しました。「宮城県経済実相報告書」が正式の名称です。国の白書も「経済実相報告書」でしたので、それにならったわけですね。いまから考えると、よくあんなことが書けたと思うほど、宮城県と県政そのことを統計でこっぴどく批判し、進むべき方向を示したわけですね。

つまり、藩政時代から東北の雄藩といばっていただけれども、実際は米に依存している経済、米遣経済という言葉がありましたね、米に依存している経済で、藩政時代からも米以外つくらなかつたわけですね。福島とか山形とか、ほかはみんなそれぞれいろいろ副業的なものをやっ

たけれども、仙台藩は米だけに依存していた。米を千石船で江戸に移出して、江戸で米が値上がりをしたときに放出する。それで藩政を賄っていたわけです。

ですから、農家1年の経済というのは、米の作、不作によって決まってしまう。しかも東畑精一先生の言葉をかき取っていえば、3年に1度の確定周期性をもって、不作凶作がある。仙台で動く金は多いけれども、それは東北各県に散らばってしまうので、動く金は大きく見えても宮城県自体の経済というのは非常に弱い東北一の貧乏県だと書いたわけです。

それが新聞に連載されたので、調査課の職員は、おまえの課は何とということをやめるのかとしかられるし、県議会では、知事がやられるわけですよ。

実はそれを出すときにも、内務部長、副知事が、こんなものを出したら県方は袋だたきになると反対したわけです。しかし、知事のところへ行ったら、「実はこれは出せない。内務部長が反対されている」といったら、「君も僕もよそ者なんだから、追い出されたらやめるだけのことだからこれを出せ」。決裁文書の知事のところには捺印されました。それで強引に出しちゃった。

そうしたら、けんけんごうごうたる非難を浴びたけれども、しかしそれが転機になって、県議会で統計数字を使って質問するときには調査課に来て、数字をくれというようになりました。調査課に県議さん方が入れかわり立ちかわり来るようになって、県庁内では見直されたといえましょう。そのかわり、私も少し反骨精神が旺盛だったために、統計局などには大分迷惑をかけてしまった。

これは少し横道に入りますけれども、統計局には当時3丁目1番地といわれていた高等官3等1級俸の課長が何人もおられました。森数樹先生も3丁目1番地に14年くらいおられたんです。それ以上昇給もないわけで、勅任待遇ということになっていたのです。

そういう方が来られると、とにかく大変なんです。粗略な扱いをしないようにとか、いろいろ予告の電話がかかってくる。あるとき3丁目1番地の課長さんが、調査課の私の部屋に来られたので、私のすわっているいすに「おすわりください」といったところか、「私は勅任官である。このいすは勅任官のすわるいすじゃない」とってすわらないのですよ。そこで、会議中の内務部長のところへ飛んで行って、こういうことなんだっていったら、「オレの部屋に連れて行って、オレのいすにすわらせておけ」というんですね。それで内務部長室の内務部長のいすをお勧めしたら、「これならけっこう」。(笑)

それから海岸地方を視察されるというので、町村役場にすぐ電話をして、「きょうこれから視察に行かれる方は偉い方だから、閣下とお呼びするように」と指令を出した。そうしたら、帰ってこられてから、「県庁、本庁の連中は礼儀を知らないが、町村の連中は礼儀をわきまえていて非常に気持ちよかった」。(笑)と、ごきげんうるわしい。そんなこともありました。

三渚 統計委員会との関係を、さっきちょっとおっしゃいましたけれども、何か宮城県の調査課、要するに公共団体の統計課から見て、その当時の統計委員会はどうかという一部を……。

後藤 私が一番初めに統計委員会に行ったときには、美

濃部先生にお目にかかりました。

三渚 事務局長ですか。

後藤 ええ。経済安定本部の一室に寝泊まりして、自炊している方もあった。

奥野 中原勲平さんとか。

後藤 中原勲平君、道下忠行君などは軍服を着ていました。

初めて行ったときに、美濃部先生のすぐそばに井上さん、いまの美濃部夫人がおられたのを覚えております。

それで初対面のごあいさつをして、山中さんともそこで初対面のごあいさつをした。これから私が統計の仕事をやる上で一番やはり頼りになるのはここだということを感じました。

次に行ったのが内閣統計局でした。私は戦争中、内閣の技術院にいたけれども、統計局は終戦直前は企画院の中に吸収されていたんです。ですから、直接私は何もつながらなかったんです。しかし山中さんが統計局の総務課長を兼務されていたから、そのご指示で統計局にごあいさつに行きました。局長はまだ川島孝考さんのときですよ。正木先生もおられました。正木先生は次長でしたか。

三渚 川島さんから森田さんですね。

後藤 少し余談になるかもしれませんが、私は千葉さんから統計は大事だといわれて心を入れかえたわけですよ。

(笑) 赴任するときは、私も本当は宮城県に長くいるつもりはなかったんです。郷里は大分です。それで知事からいきなり「統計大事だからしっかりやれ」といわれて、いささかショックを受けて旅館に戻ったんです。



そうしたら夜11時ごろ、隣の部屋に大ぜいの人かどやどや入ってきて、宴会の2次会が始まった。内務省から派遣されてきているある課長の送別会が流れてきて、隣でまた飲み始めたんです。

そのときに、新任の課長に向かって宮城県を離れていく前任の課長さんが、「君のためにいろいろ参考になる意見を伝えておく」ということをいい出されて、県の職員録によって県の幹部職員一人一人の人物批評を始めたわけです。私はそつと布団から抜け出して、その日もらったばかりの職員録を出して見ていた。

ところが、「きょう着任したばかりのあの後藤っていう秘書課長は何だ。よそ者で民間の会社において役人の経験も短いし、それが秘書課長として何かできるか、これは見ものだ。今後の秘書課長の様子を知らせてくれ」と話している。そして最後には「みんな一日も早く本庁復帰ができるように乾杯！」とあって、みんな乾杯して帰っていった。

それを聞いて、中央から県に来る役人が本庁復帰をいっつも考えながら仕事をしている。何ということだろう。少なくとも私は今夜から宮城県に骨を埋めるぐらいのつもりでやらなければならぬと決意をしました。

翌日千葉知事に、「一生懸命やります。統計は決して得手ではないけれども、心を入れかえて統計を勉強いたします」ということを申し上げたんです。そこで、統計について経験のある者を集めて、2月1日から調査課がスタートしたわけです。

そのころ宮城県庁の別の課長に、いま富山県で町長をされています森松孝作さんという方がおられました。農

林省から戦争中に宮城県に出向して来られて、統計課が廃止されるまで統計課長でした。その森松さんと一緒に、やはり農林省にいた小田切さんという人が課長補佐になって発足しました。森松さんは、私が調査課の専任課長となった後、私の後任の秘書課長にられました。その森松さんという方が統計のベテランだったんで、森松さんの指導を受けながらやりました。

調査課には、百何人も人が集まりましたが、特に、引き揚げて来た人たちの中には非常に有能な人材がいました。その中の1人は、たちまち県の職員組合の執行委員長になって、2・1ストを推進する旗頭になったんです。それで私は彼とは非常に親しくしていたので、県庁の中から、秘書課長は危険人物だという者もありました。千葉知事に呼ばれて、「君のことを危険人物だ、労働組合を指導している、2・1ストを、君はとめようとしていないといううわさがあるんだけど」と、聞かれたんです。そこで、「知事さん、ご安心ください。戦争中、私は昭和塾の第1回生で、九大事件でおやめになって、後に朝日新聞の論説委員長をされた佐々弘雄さんに師事して、戦争理論の勉強をやりました。クラウゼビッツの「戦争論」に始まって、ルーテンドルフの総力戦論、レーニンの兵法、孫子の兵法、山鹿素行の兵法、石原莞爾の「世界最終戦」、それから酒井中將の「戦争指導の実際」などを読みました。特にそれを勉強した理由は、日本はいずれ敗戦から講和までの期間が来る、それが戦争指導の一番むずかしい時期であって、戦勝国からいえばどれだけ収穫を得るかの時期、敗戦国から見ればどれだけ取られずに済むかの最も重要な時期だ。佐々先生は、戦争指導

の一番むずかしい時期のために勉強しようといわれて、佐々さんのお宅へ行ったり、朝日新聞社へ行ったりしてディスカッションしたものでした。その私の経験からいえば、2月1日のゼネストには必ず占領軍から中止の命令が出る。戦勝国がそういうことを許すことはあり得ない、ストになることは、99%ないと私は確信をしていた。そうだとするならば、知事が労働組合の動きに対しては圧力を加える必要はないと思うと、知事に申し上げた。私の予想のように、1月31日の晩にGHQからスト中止命令が出され、土橋委員長がNHKのラジオで泣きながら中止を声明する放送が行われたのでした。

調査課の職員は、統計を本当に一生懸命やりました。そのかわり、困ったこともありました。たとえば、労働力調査の担当の係長決めたときに、職務上知った秘密も、たとえ上司から聞かれても、絶対に漏らしてはいけなないといったんです。

そのうち、私が労働力調査の結果を早く知りたいということが起きて、彼を呼んだところが、「課長のおっしゃることはおかしい。たとえ上司から聞かれても、数字はいうなということをおなたがいわれたのに、それを私にいえといわれるのはおかしい」とやられました。それは笑い話で済んだのですが。

三渚　もうすでに統計法はできていたですね。

後藤　できていました。

もう1つは、アイオン台風の後、台風の被害地だけは3カ月間調査を延ばしたのです。その3カ月おくれた調査が始まる時に、統計局から1人の課長補佐が来られた。その方が私の部屋に入ってこられて、いきなり私に

向かって「あなたに命令を伝達する」といわれるんですね。「何ですか」と聞いたら、「本日以後、水害地の補正調査については私が直接指揮をとります」と、いわれたんです。

考えてみると、これは国の委任事務ですから、主務官庁の指揮を受けるのは当然なんですけれども、言い方がこっちは気に入らなかったわけですね。それで、「ああ、そうですね。この調査については統計局のご指導を受けなければならぬ」と思っていましたけれども、指揮をとるのは私だと思っておりました。どうぞ今日以後、ご自由に指揮をおとりください」といってしまったんです。そうしたらその方、憤慨してすぐ東京に帰ってしまいました。

三渚 その人はまだ生きていますか。(笑)

後藤 生きておられます。

三渚 中央、地方という意識が非常に強かったんですね。

後藤 そうですね。

奥野 課の職員が一生懸命やったというのは何ででしょうね。国のレベルでも、統計委員会に入った人はみんな一生懸命やったんですけれども、自治体でも……。

後藤 調査課は、役人の経歴余りない人間の集団でした。私は経験年数は短いけれども、役人としての訓練だけは私が技術院に入ったときに厳しく受けたんです。三菱をやめて内閣技術院参技官になったときに、私の上司の課長が下山事件の下山さんだったんです。そして下山さんのもとに、庶務主任官の磯崎勉さんという方がいて、私の指導に当たられました。

三猪 それも国鉄の人でしょう？

後藤 国鉄の総裁をやった磯崎叡さんのお兄さんです。磯崎さんは技術屋さんでしたけれども、戦後は運輸省の事務官のポストについているくらい、事務に堪能な方でした。その下山さんと磯崎さんが、「1カ月間は役人としての厳しい訓練をするから、そのつもりでいろ」と申し渡されました。まず最初は官報の読み方から始まる。数日間、1日中官報だけ読めというんですね。そして夕方に、私に対していろいろ質問するという。たとえば、「高等官何等に叙する」という欄と、それから別の欄に同じ人物について「何々課長に補する」というように、任命と補職が別々に出てくる。そういうことについてなぜ両方に名前がこう出てくるのかというような質問をするわけですね。

官報が終わると、技術院総務部総務課の文書の起案を全部私にさせるんです。それも、ほかのを見てそれにならって起案しろとあって、具体的に教えてくれないのです。書いて持っていくと、「間違いがある。やり直し」といわれて、どこが悪いということもなかなかいわれないんです。最初するとき、どうしてもわからないので、とうとう頭を下げて、「間違っているところを教えてください」というと、「起案者の欄に後藤正夫と書いてあるのは間違いで、後藤参技官と官職名で書かなければいけない」という。1週間ぐらいこのような訓練をやられたんです。

ですから、宮城県の課長になっても、やはりそういう基礎的な訓練をピシッとやられている人はたくさんはいないので、私はかなり厳しい訓練をやりました。

また、いままで"の役所のしきたりにこだわらないで、

新しいことを同時にどんどんやりました。たとえば、宮城県庁には当時は女性の事務官がいませんでした。私は「これだけ経験のある人を事務官に任命しないのはおかしい」といって、人事課と交渉して、初の女性の事務官を発令してもらいました。

そういうことから、調査課はある意味ではいい意味の統計一家みたいな状態でした。というのは、100人を超える職員のうちの90人は私が面接して採用した人ですから、本当にみんなが意気投合しているんなことをやれました。

三猪 それはいわゆる学校の新卒ばかりではないんでしょう？

後藤 復員、引揚者が多かったです。もちろん当時の旧制の女学校、中学校新卒も採用しました。100人もいると、病人が出たり、生活上困ったことが起きたりする人も出たので、私は調和会という会をつくって、毎月みんなで積立金をして、それを融資をするような小さな共済組織を課の中につくることもやりました。また、職場の恋愛結婚第1号の仲人を務めたこともあり、非常に楽しい毎日でした。

もちろん食糧事情の悪いときで、苦しいこともありましたね。秘書課で、知事さんの特命で、木の箱で小麦粉からパンを焼く実験をしたり、まるで見せ物みたいなこともやりました。お客さんを前にして焼いて見せる、そういうことをやらされた。

奥野 パン焼器ってありましたね。

後藤 電極を入れた、あれですよ。それから海草からそうめんをつくる仕事もやりました。海宝麺というのはテ

ングサなど上等な海草を使ってつくるものですが、  
 当時はとにかくおなかの足しになればいい。それで、  
 日10万食分つくれという知事の命令があったんです。横  
 浜で、ホドジンという防虫剤をつくっていた保土谷曹達  
 (いまの保土谷化学)が日10万食つくっていたので、  
 知事の紹介状を持って、夜行列車で上京して見学をし  
 ました。保土谷曹達の社長にお目にかかって現場へ行っ  
 て1週間くらい見て、つくり方を習得する予定でした。し  
 かし、つくり方はきわめて簡単でした。1時間くらい見  
 て、直ちに夜行列車で仙台に帰りました。海草をソーダ  
 灰と一緒にゴトゴト煮ると、のりみたいなものができま  
 す。それを塩化カルシウムの液の中に、トコロテンを押し  
 出すように押し出して、あと、水洗いすれば、そうめ  
 んのようなものができるとです。作り方はいたって簡単  
 で、ただそれだけの薬や材料があるかないかの問題でし  
 た。

夜行列車でトンボ返りをした私は、県庁を総動員して  
 海岸から海草を集める。それからソーダ灰は、船岡の海  
 軍の海軍の火薬廠の跡に県が保管している特殊物件の中  
 にあることがわかったので、正規の手続きを省略して放出  
 しました。これは後で知事の背任事件にまで発展しまし  
 た。しかし、塩化カルシウムはどこにもない。そこで、  
 海岸地方で戦争中からドラム缶で海水を煮詰めて塩をと  
 った後、にがりの濃い液を捨てていることを思い出して、  
 そのにがりの濃い液を捨てないで、ドラム缶で仙台市内  
 へ運びました。これを大きなタンクの中に入れて石灰乳  
 を入れると、マグネシウムとカルシウムが入れかわって  
 塩化カルシウムの液ができる。それをまたドラム缶に詰

めて保存する。東北金属の遊休施設や酒造工場の遊休施設を使って海草からそうめんをつくる仕事を始めて、8月に入ってやっと1日5万食分ぐらいつくりました。

次は地熱の開発。鳴子中山平で地熱で、電燈をつけよという知事の命令です。これは1年ぐらいかかって、5馬力の低圧タービンを回して発電をして、電燈10ぐらいつけた。高松宮様がそれをごらんになって、記者会見で「これならパーマネント屋さんぐらいやれますね」とおっしゃったのが新聞に大きく出ました。知事はそれまで東北本線を全部地熱で電化するといっていたのに、宮様が「パーマネント屋さんぐらならやれる」といわれたんで、もうみんながっかり。

あとは、統計統計で、いろいろな白書のような資料を次々つくる。県議会の委員会に呼び出されては、「調査課の予算要求の額が少ないが、調査課長これでいいのか」「査定されてこれだけになったのか、それとも要求がこの額なのか」という質問を受けるようなありさまで、資料をつくるお金には不自由しなくなった。ですから、課の職員もみんな張り切って仕事をやることができました。奥野 わりにしょっちゅう統計の仕事で東京へは来られましたか。

後藤 ええ。統計の仕事では、毎月1回ぐらい。国鉄のパスをいただいていたから。

奥野 それは統計課長としてですか。

後藤 各県の統計課長1名パスをもらっていて、これは全国通用ではないんです。その任地の県と東京の間で、県内はその無賃乗車証を使える。

しかし、乗車証はもらっていても、なかなか列車に乗



れないのです。私は妙な因縁で仙台の朝鮮人連盟の人たちと非常に仲よくなっていて、朝鮮人というのは当時は非常に力を持っていて、夜行や急行の列車に専用車というのがある、それに乗せてもらったこともありました。

三渚 事実上ですか。

後藤 事実上。ほかの人を乗せない。私だけそれに乗せてくれるんです。

三渚 戦勝国だものね。

後藤 そうなんです、戦勝国なんです。それはいまではなつかしい思い出です。

三渚 東京にいらっしゃると、いわゆる中央というのはさっき統計局の話にありました統計委員会ですが、ほかの省庁は……？

後藤 ほかの省庁にも行きましたし、大澤さん、久我さんのころ、農林省などにもよく行きましたね。宮城県だけ委託費の金券をなかなか渡してくれないから、どうしても課長行ってくれといわれて、私が行って交渉をした。そうしたらちょうどその係の人がいなくて、その隣の席の人が「いや、宮城県の分はたしか係長の引き出しの中に金券が入っているはずですよ」といってあけたら、そこに入っているんです。

三渚 その金券って何ですか。

後藤 お金の券、小切手みたいなもので、予算の令達書です。それで、係長は間もなく席に戻ったのですが、何とかか人とかごねて渡してくれないのです。とうとうがまんし切れなくなつて、「その引き出しの中に入っている金券早くください」とって。(笑)

三渚 それは農林省ですか。

後藤 農林省。

三渚 やっぱり統計委員会が一番多いですか。

後藤 統計委員会が一番多いですね。統計委員会、次が統計局でしょう。

ともかく統計委員会へ行くと、とても私どもを大事にしてくださるんですね。ほかの省庁とは全然違うんですね。それがとてもうれしかったですね。

ですから私もそれにならって、町村の方々が見えたときにはできるだけ丁寧にするように、全員にいつもそういうことを心がけるように書いていたんです。

後日のことですが、私が宮城県をやめたとき、ある町の統計係長さんが私のところに来てあいさつをされたとき、「課長は自分じゃ気づかれていなかったかもしれないけれども、県庁で私が課長のところに行ったときに、立ってあいさつしてくれたのはあなただけでした。」そういうことをいわれました。自分じゃ全然そんなこと気がつかなかったですね。やはりそういうふうに心がけたのも統計委員会を見なだったことで、本当によかったんだなと思いました。

三渚 統計委員会にもそういう雰囲気か……。

後藤 統計委員会にもありましたね。

奥野 みんな素人でしたからね。

後藤 私が統計委員会に来てからも、やはりそういうことは忘れられなかったですね。ですから、県庁の課長さん方や係長さんなんかおいでになれば、必ず立っておしきをした。

ただ、私は人の名前を覚える才能がないので、札の引き出しの中に、課長会議のときと、課長補佐の会議のと

きに撮った写真の上に県と氏名を書いた紙を張って入れておくんです。それで相手の方がどなたか思い出せないときは、そつと引き出しをあけてカンニングするわけね。ある日、カンニングしてもどうしてもわからない。「雪はどうでしたか」といっても「雪はこのごろ少ないですね」というし、「列車はどうですか」というと「旅行する方は大変でしょう」というし、どうしてもわからないんで、その人が帰った後に庶務の人に「さっき見えたの、あれは何県の方だったのか」と聞いてたら、「あれはいつもうちに来る印鑑屋さんだ」とて。(笑)

### 山中さんとライスさん

後藤 統計委員会では、山中さんに教えられることが一番多かったと思います。しかも山中さんは話をしていてもお気の毒なくらい原爆症で苦しんでおられて、明治神宮の絵画館の中に統計委員会の事務局があったころだったでしょうか、突然倒れてお医者さん呼ばれた、そういうこともありました。でも、山中さんにお目にかかることがなかったら、私は統計委員会に来ることもなかっただろうと思います。

奥野 山中さんは本当に人なつこくて、親しみがありませんでしたね。

後藤 山中さんの印象が忘れられない。

もう一つは、やっぱりライスの報告書ですね。

奥野 宮城に行かれて間もなく、第1次の報告書が出るんですね。

三渚 何年でしたか、ライス報告は。

奥野 22年じゃないかな、21年の暮れに来ているんですから。

三猪 22年だろうな。

奥野 3カ月ぐらいでまとめて出しているんですね。

後藤 1947年、戦後最初のISI総会で、ライスさんは次のように述べています。「われわれの時代の最重要な課題は、平和と安全の維持である。この問題の有効な解決は、国及び個人が政治的、経済的、社会的事態を平和な状態に保つよう行動する能力があるかどうかにかかっている。そのための第一歩は、これらの人間の間に横たわっている問題の核心を取り出すことであろう。もしそうだとするならば、私は統計家が最高の道徳的責任に直面しなければならないと信じている。国際的組織であろうと、国の政治組織であろうと、あるいは個人企業であろうと、たとえ純粹の研究であろうと、事実を正しく把握するために、正しい信頼できるデータを確保する方法を進展させるために、常に努力しなければならない。もしわれわれがその目的を達成しようとするならば、われわれは平和を樹立し、戦争のない世界を持つことに対して希望を持つことができるであろう。

これが私にとっては忘れられないライスさんの言葉ですね。

奥野 それは開会あいさつかな。

後藤 ライスリポートでしょうか。12月22日にライスさんが着かれて、最初の統計委員会に出席を……。

奥野 そうです。それで最初の統計委員会に出席されたんです。

三猪 「制度史」には載ってないの？

奥野 それがいまちょっとどうなのかなと思って。いまお読みになった原文がどこにあるのかなと思ってね。

三渚 ロスがしゃべったのは見たけどね。

奥野 じゃ、ライスレポートかもしれないね。ライスレポートは、ライスさんが一番初めタイプで打ったものが1月下旬に出ているんですね。それが草案なんですよ。彼は書き残して先に帰って、最後に3月ぐらいにまとめたものが正式なレポートになっている。

後藤 私は「ライスさんの言葉」というところに、昭和21年12月28日と書いてあるんですね。

奥野 それじゃそのときのあいさつですね。

後藤 それは何かにあったんだと思うんです。

奥野 調べてみます。

後藤 一応確かめてみていただきたいと思います。

奥野 はい、わかりました。

後藤 そのことと、それから千葉三郎さんから「統計をしっかりとやれ」といわれた、その3つが統計を一生懸命やった動機で、本当に私は統計を好きで始めたということではなかったんです。美濃部先生もそういっておられたけれども、外国へ行って統計家の人に「あなたは統計好きか」といわれても、「決して統計の仕事は楽しいと思っただけでやっただけだけれども、ただ統計は非常に大事だということと一生懸命やっているんだ」という、それを聞いたといっておられたんですが、私もやっぱり統計は非常に大事だと思ってやったんです。もっとも、統計委員会に来られた方、あるいは後に統計基準局に来られた方の中には、統計が非常に好きで来られた方もありますけれども。

## 占領軍と統計

三 渚 宮城県時代、現地の占領軍と統計に関して何か接触ありましたか。

後 藤 それはありました。千葉知事が統計に非常に熱心だった。統計がなければものがない。だから占領軍と知事の折衝のときには、いつも数字を持っていかなくては相手と話ができないということで、千葉さんが統計を非常に大事にされました。

それからCPS（コンシューマー・プライス・サーベイ＝消費者価格調査）が始まったころ、調査員になり手がいないんです。最初のCPSは、指導員といって県庁の職員じゃなかったんです。各県に置かれた統計局が直接給料を払う指導員で、籍は統計主管課に置いていますけれども、統計局直属の調査員としてスタートしていましたが、調査員になり手がいないので、私もその調査員の仕事を補うために世帯を回って歩いたことがあります。「ごめんください」といったら、いきなり「きょうは間に合っています」なんて答えられたり、とても情けない思いしたこともあります。(笑)

三 渚 仙台の占領軍が直接統計の作成を命ずるということはなかったんでしょうか、調査課に。

後 藤 それはありませんでした。

三 渚 CPSとか、労働力はみんな中央ですね。

後 藤 中央。それでCPSの成績が非常に悪いというので、当時、これは宮城県での選任のやり方がまずかったというんでしょうか、統計局が任命した調査員がどうに

もぐうたらだった。非常に投げやりなやり方でどうにも  
 ならなくなっていて、森（数樹）先生がGHQの人と一緒に  
 乗り込んでこられたんです。その数日前に統計局から電  
 話が入って、調査員も呼んでおくようにということで、  
 本人も来ていました。知事室でのことで、知事もおられ  
 たのですが、GHQの担当官は、統計局が任命した調査  
 員に「きょう限り、あなたはこの仕事をする必要はない  
 そして私を指さして、「そのかわりあなたかきょうからこ  
 の仕事をやるよう命令する」というんです。私は、「私は  
 知事の指揮下にある人間で、日本が占領されていること  
 はわかるけれども、占領軍から直接指揮命令を受ける立  
 場にはないから、知事に命令をしていただきたい。知事  
 が後藤やれといわれれば私はやりませう」といったんです。  
 そうしたら、非常に妙な顔をしていましたけれども、結  
 局知事に話をされて、知事から、「ああいうんだから怒ら  
 ないでやれ」ということで、私も世帯を回って歩いたり  
 して、その後始末をやりました。

知事室での会見の後、GHQの担当官は、仙台市長を  
 表敬訪問したんです。そのとき、私は森先生には何もお  
 願いしていないのに、GHQの人のあいさつを通訳され  
 た森先生は、いきなり市長さんに、「米国占領軍は、直ち  
 に仙台市に統計課を設けるように要請されています」と  
 言われたんですね。そしたら市長さんは「かしこまり  
 ました」と答えられました。仙台市に統計課ができたの  
 は、その数日後でした。(笑)

三渚 そんな芸当ができたんですか。

後藤 GHQの人は、一言もそういうこといわないんで  
 すよ。(笑)

奥野 統計課ができることはよかったですね。

三渚 後藤さん、CPSに調査員で回られたというのは、消費者価格調査だから世帯を？

後藤 世帯です。

三渚 指導にいらしたのですか。

後藤 回ったのはそうじゃないんです。

三渚 書きにいらしたわけじゃないでしょう。

後藤 調査票を持って頼みに行って、そして集める仕事もしばらくやりました。

三渚 じゃ、記入をなすったというんじゃないですか。

後藤 記入じゃないんです。統計局が任命した調査指導員というのは、何世帯かを回ってやる、その仕事を、本人が罷免されたものだから、知事からは、軌道に乗るまでは秘書課の仕事はやらなくていいからそれをやってくれということ、もちろん私一人でなく何人か手伝わせて調査する。

三渚 仙台で、対象は、もう古いからご記憶ないんですけれども、何十でしょうね。28都市かなんかで。

後藤 そうですね、28都市で。世帯数はどのくらいだったかな。

三渚 100はないですね。

後藤 100ないです。

三渚 あれは大根1本買って紙に書いたんですね。

後藤 それで一度困ったのは、知事公舎が客体に当たっちゃったんですね。

奥野 ランダムの……。

後藤 ええ、ランダムに当たってしまったんです。そのときはもうその仕事は県の方に移管されていて、小沼さ



んという厚生省の統計部にずっとその後いた……。

奥野 小沼さん、聞いたことあります。

後藤 その小沼さんが担当だったんです。小沼さんは、「当たったんだから、これはやってくれなきゃ困る」といわれるんだけれども、知事は私に「勘弁してくれ」とっていわれるんですね。(笑)

三渚 全く横道ですけれども、そのころ米沢治文先生なんかとは全く……？

後藤 そのころ私は何かと米沢先生のご指導を受けました。また調査課の方にも来てくださってご指導いただきました。

三渚 じゃ、米沢先生とはずいぶん長いおつき合い。

後藤 長いつき合っていました。知事さんも統計が好きですから、米沢先生を呼んできて……。

三渚 おととい東京にいらっしやった。

後藤 食事をした後、「何か歌を歌え」といったら、米沢さん、いきなり赤旗を歌い出しちゃった。「インターナショナル」歌い出した。

三渚 ご存じだと思うけれども、米沢さんは一高時代にいわゆる赤で、東北大学——ぼくも東北大なんですからけれども、東北大っていうのは旧制高校全部出ないでも検定で入れる。東北大の出身なんですよ。それであの方は音楽好きなんですよ。

東北大学のオーケストラの中で何か楽器をなされた。ダンスはうまいし、見かけによらないといったら悪いけれども、音楽得手でした。

後藤 米沢先生、その後は末永先生。末永先生は統計局から行かれた。

三渚 あれはおもしろい話をするんです。僕は、教育大へ行きましたでしょう。教育大へ統計局から末永さんを引っ張ろうと思ったんですよ。ちょっとあることで失敗しまして、東北大に引っ張られちゃった。

後藤 統計局の調査部長さんの部屋に入っていったら、すぐ横の机に何か見たことのある人がいるんですね。向こうも立ち上がって私の顔をじっと見つめているんです。そしてそのうち「後藤君じゃありませんか、斉藤です」っていうんですね。斉藤金一郎さん。

私は暁星で斉藤先生と一緒になったんです。それで妙な話ですけれども、1年の1学期のときは指名だったけれども、1年の2学期から級長選挙というのをやったんですね。

奥野 暁星ではそんなことをやったんですか。

後藤 ええ、級長選挙。それで1年の2学期から私は毎回級長選挙で当選していたんですね。ところが、私はひどいせんそく持ちだったんで、3年生の前半はちくのう症の手術をしたり、アデノイドの手術をしたりして、ほとんど出席していません。それでも選挙のときには級長に選ばれた。2学期も半分ぐらいしか出ないで3学期を迎えたわけですよ。

そうしたら、受け持ちの先生が私のところへせんそくの見舞いに来て、「君、また級長に選挙されたんだ。しかし、君はあと3学期全部出席しても、年間の必要日数の半分出席してないから進級できない。級長が落第するのは非常に困るんで、級長は辞退してくれないか」といわれる。もちろんこちらだって嫌ですから、副級長の斉藤金一郎さんにバトンタッチをした。そんな因縁があるん

ですよ。

齊藤さんは中学校4年から大阪高等学校に入られて、東大の数学を出て海軍兵学校の教官。だから僕ずっと会っていなかった。それが偶然統計局の調査部長室でめぐり会ったんです。その後齊藤さんはGHQに入ったんです。

奥野 GHQの後は、どこかの先生でしょう。

後藤 上智大学、経済学部長。それからトンプソンの日本の社長、そして再度上智大学教授です。

三瀨 それで、後藤さんはフランス語なんですね、暁星で。

後藤 英語よりフランス語の方が長かったんです。

奥野 齊藤先生を統計審議会の委員に引っ張ってこられたのは、局長やっていらしたときですか。

後藤 これは山内先生と相談してのことだったと思います。

三瀨 あのころ齊藤金一郎氏は分類の部会長だったんですよ。僕も部会に出ていた。あるいい線を出してくださって。

後藤 中学校4年から大阪高等学校へ行かれたんですから、なかなか秀才でした。

奥野 戦後の統計再建のころは、美濃部さんだって42歳ぐらいですよものね。どうしてあのころ、あの年配の人があんなに張り切ってやったんでしょうね。いまわれわれは、とっくにその年を越えて、まだぼ"やぼ"やしていますけれども。

三瀨 大内さんが57ね。

奥野 大内先生と有澤先生以外みんな40代。

後藤 とにかく、先生方が統計に対して大変な情熱を持ってやっておられましたからね。それから各省の統計、たらい回しで来る方は別ですけども、久我さんなんて方は本当に統計を一生懸命やっておられた。

ですから美濃部先生が統計基準局をおやめになるときに、私に後任の問題で相談があったので、後任は久我さん以外にはないというわけで、久我さんの説得をやったわけですよ。ところが、久我さんという方はさすがなんですよ。せっかく自分を統計基準局長にご推薦いただいて、それはありがたいことだと思っただけけれども、戦後の苦しい統計の中を、いわゆる作報の人たちと自分とは行動を共にしてきた。その作物報告事務所が、当時はもう縮小縮小でしょう。一番苦境に立たされている。その人たちを置き去りにして自分は農林省をやめるわけにはいかないとされる。それならば、むしろ統計基準局長になられて、農林省の統計の人たちのためになることをされたらどうかということもいっても、久我さんはどうしてもそれはできないと断られたんです。

三猪 近藤康男先生もそうで、農林省の統計の組織というのは非常に、団結強固という言い方はおかしいけれども、一番強い。だから、ご承知のように統計委員会でいろいろありましたよね。

奥野 あそこはやっぱり学問的にかちっと固まっている感じですね、通産なんかに比べて。

三猪 近藤さんが課長のころに。

奥野 農林省のカラーじゃないかと思うんです、学問的なのは。

後藤 あのと時の大沢さんて方も非常にしっかりした方

ですね。

三瀨 大沢融さん。

後藤 大沢さんもそうだったし、もちろん前の部長さんもそうだった。

三瀨 京都の鈴木稔さんて方、ご存じですか。いま同志社か立命館……。

後藤 よく存じています。京都のお宅に病気の見舞いに伺ったこともありました。作報について、私は協力的な立場をとりました。ものすごい反対だったんですよ。宮城県は農業県だったんで、農業統計をしっかりとつくるのが必要だということと、私は大沢さんに対して協力の約束をした。それで宮城県が崩れたということと、いまから考えたら……。東北6県がみんな同調した。

統計委員会へ

奥野 今度は統計委員会の方へ移りまして、統計委員会へお入りになったのは24年7月ですけれども、その辺のいきさつは……？

後藤 山中さんから、ぜひ中央に出てきて統計をやらないかというお勧めがありました。大内先生も山中さんからやはりその話を聞いておられたんでしょう。統計を一生懸命やる気持ちがあるのなら、東京に出てきて統計の仕事をする気はないかというお話が大内先生からもあったんですが、私は宮城県にとにかく骨を埋める覚悟でいましたから。

三瀨 もちろんまだ千葉さんでしょう？

後藤 そのころはまだ千葉さんでした。千葉さんが知事

から宮城県で衆議院議員に出て、その次の選挙のときには今度は千葉県に戻って、郷里の千葉県から出られて、そのときには、私は宮城県に残っていたわけです。千葉さんがやめられたら、みんな私はすぐ東京に出ていくだろうと思っていたんですが、私はすぐには東京に出ないで残ったんです。

話が横道に入って悪いんですが、これもちょっとしたいきさつがあった。たくさん採用した職員の中には、大きな欠点のある者もいたんです。佐々木家壽治という県議会の古い議員の方の推薦で、私が身元保証人になるから採ってくれということ、復員した人を採ったことがありました。ところが、その人が、お酒に酔っばらうと女の人の向かって左側のほっぺたにかみつく癖があったんです。(笑) それは面接じゃわからなくて、採用したわけです。

その男が最初の給料をもらったときに、初めての給料だからこれで上役の方々にごちそうすると言って、係長さんはかり3人連れて料理屋に行ったんです。それが運悪くサマータイムの、しかも料飲店が閉鎖されている時期があったでしょう。そのときにいわゆる裏口営業のところへ行って、そして酔っばらうと、その店の女の人の左のほっぺたにかみついて、さらに通行していた女の人のほっぺたにかみついた。このことが新聞記事に出ちゃったので、私は直ちに進退伺を出した。それから推薦をされた議員の方に私はおわびに行った。私の監督不行き届きのために、3人も係長がついていながら、大変な不始末をしてしまった、これは私の責任だと、おわびに行った。

すると、その先生が両手をついて、「これは私の間違いだった、私の方が悪かった。しかし、私は一介の県会議員で、何にもあなたのためにすることができない。将来私が生きている間にあなたに償いをしたい。それまでお預けにしてくれ」といわれたんです。

ところが、千葉さんがやめた後の知事選で、その方が立候補したんです。そして千葉知事が支持していた現職の県会議長に勝って当選したわけです。

佐々木家壽治さんの初出勤の日に、私は副知事に呼ばれました。いま知事が来て、調査課長の後藤を呼べといっておられる。君は役人の経験が短いだろうから参考のためにいっておくけれども、役人というのはやめ際に非常に重要だ。多分君は千葉さんの子分だから、その引導を渡されるんだろう。あらかじめちゃんとお腹を据えて入りなさい、と非常にご親切なアドバイスをいただいた。

入っていくと、知事がいきなり私の手を握ってほろほろ涙をこぼされるのですよ。そして、「おかげさまで私は君にお返しをする機会を持つことができました。君の希望することを3つだけいいなさい、その3つは必ず実現するようにする」というんですね。それでこっちはびっくりしちゃったわけです。

翌日知事のところへ行って、「3つというお話だったので、お言葉に甘えて3つお願いいたします。まず第1には、私は千葉知事がおやめになったので、この際、県庁をやめさせていただきたい。第2には、早川君という耕地課の技師がいます。これは千葉知事が私と同じように宮城県に連れてきた人だけれども、調査課長としては最適任と思うので、私の後任に早川淳一をしていただきたい

い。第3番目には、窓から見ると市内至るところにアメリカの国旗がずっと見えている。県庁の屋上にはポールはあるけれども、何も旗がない。この県庁の旗ざおに日の丸の旗を掲げていただきたい。この3つが私のお願いです」といったんです。

そうしたら、「第1のやめることには同意しかねる。永久的にはいわないけれども、しばらくお預けにしてほしい、頭の中には入れておく。2番目の早川君は、君がやめるときには必ずやる。それから屋上に旗を掲げるとは、これは米軍の方の了解を得次第1日も早く掲げるようにしたい」、そういうことだったんです。

結局、私はそれから半年そのままその知事に仕えたわけなんです。それから次の早川君については、これは幾ら私がいっても、人事課長も、総務部長も、副知事も、こんなの持っていったら知事から何といわれるかわからない。この人は千葉さんやあなたと一緒に来た人で、こんなの出すわけにいかない、また県庁の中でも順序がある、というんです。私は、ただ聞かれたから申し上げるだけだといったら、知事のところへは別の人を持っていった。すると、これは気に入らないといって判をくれないって言うんですね。それからまた別のを持っていてもくれない。3回目に持っていったら、「後藤の意見を聞いてこい」といわれた。副知事は、「君、どうなのか」というから、いや私は早川君を前からお願いしているといったら、とって早川というわけにはいかないが、とにかく知事にはそういうふうに報告しますという。総務部長の判も、副知事の判もない早川と書いた起案文書を人事課長が持っていったら、知事がいきなりポンと判を押しちゃった。



(笑)

旗は、東京へ転任して半年ぐらいたって、自動車の免許証の切りかえの手続かうまくいっていなかったのが宮城県に行ったときに、県庁に知事を訪問したら、知事が「屋上を見たか、君との約束を果たした」といわれた。

大分話が横道に入りましたが、そんなことで7月には東京に出ていったんですが、山中さんの書簡に私は動かされたんです。山中さんが統計に対する理想を長々と病床で筆で書きつづっておられました。

奥野 'それがこの前捜していただいたけれど見つからなかったという書簡ですね。

三渚 あれは惜しいですな。

奥野 どこかにありますね、まだ。

後藤 ないんです。

三渚 だけど、まさか捨てるわけないから。

後藤 あれからもずいぶん捜したんですけれどもね。最後の書簡で、とにかく会いたいから上京せよというので、上京して明治神宮の絵画館に行ったら、けさ亡くなられたということ、私ははからずも山中さんのご葬儀に参列した、そういうことです。

三渚 もう全く山中さんの手紙に感銘されて……？

後藤 ええ、山中さんに動かされた。

三渚 大内先生やら美濃部先生も、もちろん誘われたのでしようが、一番強いあれは山中さん。

後藤 山中さんですね。山中さんのあの書簡がなかったら、私は決意できなかつたと思います。

奥野 統計委員会にいらしての直後の感想はいかがですか。それまではお客さんとしていらしたわけですね。

後藤 最初は、もうこれはえらい大変な役所だなと思っ  
たですね。

三渚 山中さん亡くなった後ですから、総務課長はどな  
たですか。

奥野 総務課長は内藤さんじゃなかったかな。

後藤 内藤先生。

三渚 杠文吉さんなんかはご記憶ですか。

後藤 杠さんはもちろんよく知っており、現在もずっと  
おつき合いしております。

とにかく、宮城県でもにわかづくりの大世帯だったけ  
れども、統計委員会もまたいろいろな方々の寄り合い世帯  
だったですね。事務室でない事務室だし。

三渚 何人ぐらいだったんでしたでしょうかね。40人い  
たのかな。

奥野 あれは僕も入っているときだから、40人超えてい  
るでしょう。

後藤 私の一家は上京してて、私の住んでいた家は両親  
が焼け出されて入っていたので、私には住む家がなかつ  
たんで、1年間正木先生のお宅の離れをお借りしたんで  
す。

奥野 それはどこですか。

後藤 代々木富ヶ谷。

三渚 それまでは正木先生とは……？

後藤 何にもつながりはなくて、統計委員会の辞令をいた  
だいたときに、初めて正木先生にお目にかかったんです。  
そして家がないといったら、「よかったらうちの離れがあ  
いているから来たまえ」といわれた。わりに広い離れで  
10畳、6畳ぐらい2間と、ちゃんと台所やトイレまでつ

いている離れ。つながってはいましたけれども。正木先生のお宅の離れに、住宅公庫から融資を受けて私の家が  
できるまで、1年ちょっといたんで、正木先生からもい  
ろんなことを教えていただいたんです。私にとっては大  
変な恩人です。

奥野 正木さんは常任委員ですね。

三渚 美濃部さんと2人が常任委員。

後藤 そうです。

奥野 飲みながら教えてもらったんですか。

後藤 そうです。(笑) 奥さんもとてもいい方でした。生  
活は苦しかったのですけれども、それでもとっても楽し  
かったのです。地方の課長の方が給与がよかったから。

三渚 基準統計局よりも。

後藤 いわゆる職階が下がったわけですか。

三渚 月給も減りましたか？

後藤 減りました。

三渚 何かちょっと素人の考えでは、中央の課長の方が  
地方の課長より……。

後藤 11級だったのが、10級何号俸に下がって。本庁の  
課長は大部分が11級でしたが……。それに私の場合は官  
庁経歴が短く、その上、高文を通して採用された役人と  
は差別されました。当時としては、それが普通のことデ  
した。

三渚 統計委員会というのは本庁？

後藤 本庁というよりは、中央官庁という方がいいかも  
しれません。

奥野 大体地方へ出た方が上がるんです。そうでなきゃ  
都落ちしないんです。

後藤 そうなんです。10級に下がったんですが、1年ちょっとで11級にしてください。

三渚 細かい話ですけども、7月5日発令、これおそろく間違いないと思うんですけども、いまはこういう半端な発令はめったにないと思うんです。やっぱり何かの都合でですか、大した意味はないですか。

後藤 国家行政組織法が公布されて、統計委員会が国家行政組織法による行政委員会になったのがその年の7月1日でしたが、どういうことだったか5日付ということになったんです。国家行政組織法になって、7月1日から委員長常任委員制度になった直後でした。

奥野 統計法の改正は6月1日でしたね。

後藤 その翌年の1月に高級公務員の試験というのがGHQの命令であったんです。

奥野 友安さんが落っこちたやっだ。あれが翌年ですか。

後藤 昭和25年の1月です。友安さんが落っこちて、通産省の武内さんが一番ビリに合格。(笑)

三渚 高級というのは課長になる資格？

後藤 課長以上になる資格。

三渚 課長になっていらっしゃるでしょう。

後藤 なっていても全部。要するに高文制度が廃止されたかわりに、そのとき任官している課長以上は、局長も事務次官も全部試験を受けた。それから課長の有資格者となるために、課長補佐でも受けられました。統計委員会の小島さんも受けました。美濃部、正木両常任委員は受ける必要なかったんです。多分特別職だったからでしょう。統計局長の森田先生と小島さんが非常にいい成績。

奥野 そうというのは発表になるんですか。

後藤 発表になったんです。

奥野 個人的に何番目って成績が……？

後藤 私は自分の成績を見えています。総務課長の杠さんと私とがコンマ以下まで同点だったんです。

三渚 内藤さんも受けたでしょう。

後藤 受けられたと思います。私は山かけたんです。というのは、人事院が実施する試験だから、人事院の総裁の上野陽一先生の「能率ハンドブック」の考え方で全部答えれば、いい成績がとれるだろうと山かけたんです。

答えは〇×式でした。ところが、採点のやり方が問題になって、あのときの採点は過半数がマルをつけた方を正解にするよう変更されました。だから上野陽一先生の考え方とは違っていても、過半数の者がマルをつけたものを合格と採択したんで、私は山が外れちゃった。

三渚 マル・チョン試験？

後藤 マル・チョン試験。

奥野 平均値なら合格ですか。

後藤 そうですね。

### 統計報告調整法の制定

奥野 統計委員会に来られて直後、一番大きい問題は報調法でしょうね。

後藤 そうです。しかも、報調法について初めからそれを手がけておられた河合さんがアメリカにガリオア留学されて。

奥野 あれは河合さんが首突っ込んでいたんですか。

後藤 河合さんはかなりやっておられたんです。けれど

も、法律案をつくるところまではやっておられなかったんです。しかも、河合さんの留学期間がたしか予定より長くなったのです。

奥野 ええ、延ばしました。

後藤 そのために、私と松田（道夫）君があれをやらざるを得なくなったわけですね。

この報調法の立案に協力していただいたのが、そのときの内閣審議室の増子宏さんと有馬元治（現衆議院議員）さん。内閣として全面的に手伝うようにという指示もあったんでしょ。また、法制局の担当の参事官が、これは外務事務次官から、現在ソビエト大使になられている高島さんでした。

三渚 報調法ができた日付はいつ？

後藤 あれは27年の5月24日だったかな。

奥野 機構改革の前です。

後藤 あの法律では本当に寿命の縮まる思いをしたんです。というのは、「この法律は公布の日から90日以内に施行する」と附則に書いてあったんです。それを「3カ月以内に」と思い違いをしていたんです。ところが、「3カ月以内」と「90日以内」とは違うわけですね。それを直前になって気がついたので、それで夜行列車で那須の御用邸まで「裁可をいただきに行つて、間に合わせるといふ芸当をやりました。

奥野 その当時は恥ずかしいから、そんなことお書きにならなかつたんですな。(笑)

後藤 そうです。あと2日しかないというので、陛下のご都合も伺わなきゃならないことですし、もう本当にきわどいところでした。

この法案の審議の際に、衆議院の内閣委員会で、政府委員の大内先生と議員との間でおもしろい質疑応答があったんです。

三渚 今野さんでしたっけ。

後藤 ええ、共産党の今野武雄議員。私は官報の写しを持ってしています。

奥野 議事録ですね。

後藤 衆議院内閣委員会で、米のかわりにイモが配給になったためにCPIが低く出ている月の統計を使って、公務員の給与のベースを決めているのはおかしいじゃないか。CPIというのは、勤労者にとって不利であるという質問に対して、大内先生が「CPIが決して間違っているわけではなく、1948年10月に米のかわりにイモをよけいに配ったから、そのときの食糧費が安かったのだから、その事実がちゃんと統計にあらわれている。もしそうあらわれなかったら統計の間違いである」といわれたんです。

奥野 それは日付はいつでしようか。

後藤 4月23日、第13通常国会衆議院内閣委員会議事録第15号、委員長八木一郎。

委員長が大内先生を指名するのを、大内政府委員といわないで、「大内先生」って指名したんです。議員はみんな声を出して笑いました。

後藤 この際に、これは私の自画自賛みたいなことになるけれども、全統連の発足と私とのかかわり合いをお話ししていいでしようか。

奥野 それはぜひお願いします。

後藤 それには私も一役買ったわけですね。

奥野 25年でしょう。去年30周年やったんですから。

後藤 アイオン台風の吹きまくっているときに、宮城県で東北6県・北海道統計大会とこのをやったのです。23年の9月16日だったかな。1時間に140ミリという大雨が降って、会場の東北大学の講堂の外はひさまでつかえるほどの水でした。

奥野 仙台でね。

後藤 そうです。森田先生と美濃部先生がそろってこの大会に出席をされておりました。そして、主催者は千葉三郎知事でした。

三渚 森田さんは統計局長でしょうね。

後藤 統計局長で、それから美濃部先生は統計委員会事務局長。

三渚 これは後藤さんがイニシアチブをとられて、やろうじゃないかということでは……？

後藤 私と、北海道の統計課長で洞爺丸で亡くなった伊沢（広一）さん、もう一人、山形県の統計課の課長補佐で、「最上川の舟唄」の作詩者として知られた渡辺国俊さん、この3人が急先鋒で、ぜひ仙台で東北・北海道の大会をやろうということになって、千葉知事の賛同を得て開催しました。

そのとき、統計委員会への要望決議をいたしましたのですが、その第1が「北海道・東北6県の統計関係者は、全国の統計関係者を打って一丸とする統計団体の結成を要望する。」第2に、「北海道・東北6県の統計関係者は、全国の統計関係者の意思を中央に強かに反映させるために全国統計大会の開催を要望する。」この2つの要望を出し



ております。全国統計協会連合会が結成されたのが25年2月の7日で、第1回の全国統計大会が共立講堂で開催されたのが、昭和25年の12月5日でした。

三渚 その間、各都道府県には統計協会がないところもあったわけでしょうね。

後藤 ないところもかなりあったと思います。

三渚 急遽つくったんでしょうか。

後藤 ええ、そうだと思います。

奥野 その9月16日の統計大会は、北海道・東北の統計大会として初めてですか。

後藤 各県ごとにはやっていましたが。

奥野 ブロックとしてはね。

後藤 ブロックとして初めてで、参加人員は350人ほどでした。

三渚 宮城県統計大会は。

後藤 それは別にやっておりました。

三渚 あったわけですか、その前にね。

後藤 それはやっています。

奥野 その時分、ブロック統計大会は余りありませんね。

後藤 なかったんです。全国組織をつくるためにやろうじゃないかということになった。

奥野 それ以後もないかもしれませんね。

後藤 それ以後もおそらくブロックはないと思います。

そういう因縁もあって、ことしが引回でした。私1回だけ、松江の統計大会を欠席しています。そのときは、持病だったせんそくで行けなかったんです。

松江の統計大会のスタイルが、その後少しずつ変わってきましたけれども、講武亮三さんという元気な課長さ

んがいて、今日のスタイルの始まりです。

奥野 ついでに全統連ですけれども、いまはできたときの経緯ですけれども、全統連の運営といいますか、経営にはずっとタッチしておられますね。それで、そのときどきいろいろな問題があったかと思えますけれども、いままで30年通観してみても、全統連はどんなふうな仕事をして、どんなメリットがあったか、あるいはどんな問題があるか、その辺のところどうお考えですか。

後藤 全統連は、いまは多くの方々の努力によって順調に運営されていますが、非常に経営のむずかしい時期もあったんです。しかしそれにもかかわらず、全統連がとにかくずっと発展してきた最大の理由は、阿佐ヶ谷の統計会館という財産があったおかげといえましょう。

奥野 ありました。小島豊さんの旧宅ですね。

後藤 ええ、あれを売った金が基本財産になっていたわけですね。あれがなかったら、全統連はおそらく経営難に陥っていたと思うんです。

あれを買えたのは委託費のおかげでした。各県に委託費が十分に配分されたので、各県の統計課は県費を蓄えることができました。当時全国の委託費職員の定数は、5000名超えていたでしょう。あの人件費は、地方公務員全部同じ単価で予算を計上されていました。そこで、たとえば私のいた宮城県の調査課についていえば、人員は100人以上いましたけれども、平均年齢は25歳ぐらいな人ですね。ですから、平均単価よりもずっと低いんで、差額が余るわけです。それから県の事情によって欠員の補充ができない県があって、それが余るわけです。もう一つは、県によっては70%ぐらいが女子職員で、単価が

低くなるので余るわけですね。

そこで、不用額の一部に相当する金額を各県のやりくりによって統計委員会が吸収したわけです。そのことで統計委員会事務局の総務課長をされていた杠文吉さんは大変苦勞されました。

奥野 統計会館というのは、あれは全統連のものだったんですか。

後藤 全統連のものです。

奥野 小島さんから統計委員会が買い取った。

後藤 東京都の統計部長の小坂憲三（後の大分県出納長）さんを初め各県の統計主管課長が協力したんです。余るお金をむだ遣いしないで集めましょうというわけで、集めたお金で小島さんのお宅を買い取ったわけです。さらに後日になって、それを売って法人の基本財産にしたわけです。検査院がどこかの県に検査に行ったときに、適正でない支出があったということで、中央の統計委員会かしかられたことがあったと思います。

奥野 総務課長の杠さんは困ったのでしょう。

後藤 杠さん本当にお気の毒でしたが、全統連にとっては大恩人ですよ。

それから全統連があったために、全国統計大会を毎年開催することができた。全国統計大会は、全国の統計関係者の士気を鼓舞するために、非常に有益だったと思います。いまでもそうですが、市町村の統計職員を2年か3年一生懸命やっていたら、全国大会に出席ということ国内旅行ができる。このことは非常なプラスになったと思います。

しかし、統計大会に対する批判もありました。あれは

お祭り騒ぎであって、本当に統計のために毎年1回集まるんなら、もっと内容のあるディスカッションをやるべきだ、単なるお祭りの行事で終わってしまうというのは遺憾であるというような意見がありました。しかし、そういうことを考えた人は、出席者の3分の1以下だったと思うんです。私は、全国統計大会は、統計の仕事に対する奨励的な意味で、あだなことではないと思います。

どこかの統計大会に行くときに、私は早く寝台車に乗っていたら、後から乗り込んできた統計大会に出席する人たちが話をしている。それがどうやって早く統計大会の会場からエスケープするかという相談なんですね。翌朝寝台車出られないんですよ。(笑)

奥野 そこへ着くまでね。

後藤 とにかく一生懸命統計の仕事をやれば統計大会に行けるんだということは、確かに励みになっていたと思うんですよ。

三渚 いまは研修、教育というのか、あれを行管と共催でやっていますね。

後藤 それは前からやっています。

三渚 いま実のあることは、それじゃないですか、あとは大会のお祭りだとしても。

後藤 それもありますね。毎月私のいたところから業務研修や、それから統計図表の研修をやっていた。

三渚 それからグラフのコンクール。グラフィックデザインのもの。

後藤 あのグラフのコンクールに、第1回からことしまで、一度も欠かさずに応募して、一度も落ちないで佳作か1位か2位に入り続けている人がいます。

奥野 島根県じゃないですか。

後藤 いや、宮城県の佐竹清一郎という人。もう退職してはいますけれども、ことしも入っている。1回も欠かさずですから。

奥野 僕この前行きましたでしょう。グラフ見ていたら、何か聞いたことある名前があった、そういえば。

三渚 あれは、小学校、中学校、高校、一般の部でしょう。ことし初めて委員を頼まれたんですよ。だから全く私情を交えずして、僕はその話知らないけれども、それはやっぱりいい話だと思います。

後藤 統計大会とあわせて、統計教育の指定校制度というのがありましたね。あれも非常によかったんですよ。

三渚 そうですね。いま募集していますけど、全国統計教育研究協議会というのがあって、あれが統計協会とは別の組織でやっている。

後藤 私がいたころ文部省とつくった……。

三渚 都道府県によって、非常に精疎まちまちですわ。一生懸命やっているところと有名無実と。日本統計学会がことし50周年で、その行事の一環で、全国5ブロックでいまの全国統計教育研究大会を、統計学会のメンバーが必ず加わってやる。5カ所設定して、学会から少しお金出してもらっているんですよけれどもね。

## 再び報調法について

奥野 残った問題としては、報調法を簡単にお伺いしたい。それと、この前お話がありましたデミング賞の問題、品質管理、統計機械の輸入の問題、IS Iのこと、そん

なところが大きなところで、後は振り返ってのご感想みたいなことで、統計委員会のこととか、局内のこととか何かあれば……。

後藤 後から思いついたのは、報調法やなんかの問題で、各省との関係の問題も少しやりたいと思います。

奥野 報調法で三渚さんがぜひ伺ってほしいというのをメモしてきたんですが、報調法の第2条に、「この法律の運用に当っては、関係行政機関の権限を不当に侵害しないように留意し、もっぱら統計上の見地から、統計報告の徴集について調整を行わなければならない。」とありますね。「関係行政機関の権限を不当に侵害しないように留意し、」という表現は、各省に大変遠慮しているといえますか、あるいは統計委員会の権限をあまり発揮しないようなニュアンスが見えるけれども、その辺のところ、こういう条文ができたいきさつはどうなんですか。

後藤 これをつくることについては、各省からの抵抗があったわけです。この法律を成立させるためには、ある程度各省の権限を制約することは免れないので、各省の権限を不当に侵害しないという言葉を入れることによつて、各省のこれに対する反対をできるだけ緩和したいということを入れた。つまり、これがわれわれとしてできる限界だったという感じですね。

ただ、われわれとして大変力強かったのは、経団連が全面的に支持してくれたことでした。経団連と統計基準局、つまり財界と政府との間にこのような緊密な協力関係が得られているのはきわめてまれな例であるということを経団連の機関誌にも書かれていました。財界の全面的な協力というのは、企業や事業所の報告負担を軽減す

るということでした。支援してくれました。その後、大内賞の問題とかその他の問題で、統計に対して経団連がいろいろ協力してくれたり、またISIの総会のためにも全面的な協力をしてくれたのは、このレポート・コントロールに対する統計委員会、統計基準局の協力の影響が非常に大きかったと思います。

奥野 その関係はその後も大体……。

後藤 続いてきました。そしてISIのときには、経団連が事実上募金をやってくれましたからね。あれは非常に珍しい例です。

ISIの東京総会の話になりますけれども、私も募金方法を一生懸命考えた。たとえば、募金するに当たって、経団連が、株式会社電通と本田技研は初めから交渉おやめなさいといった。つまり、絶対出さない会社で、そんなところで足踏みしていると全体がおくれるという。そこで、こちらとしては逆にそこを陥落させれば、ほかの会社からもらいやすくなると思って、まず電通と本田技研から5万円ずつ、額は少ないんですがもらったんです。

本田技研の本田社長に面会を求めたら、秘書が、「寄付のことだったらお会いになってもむだです」ということなんです。「寄付のことです」というと、「お金のことだったらお会いになってもむだです」という人ですね。そこで、「とにかく私が会いたいといっていることを本田さんに通じてくれ。本田社長の口からだめだといわれたら、これは私も断念します」といったら、社長がすぐ会うという返事だった。

雑談しているうちに、「本田さん、本田さんは“清水の舞台から落ちる”という言葉ご存じですか」と聞いてみ

たんです。そうしたら、「清水の舞台から落ちるって、それくらい私は知っているよ。一度でいいから、清水の舞台から落ちてみたいものだね」とっていったんです。(笑)

奥野 そういったんですか。

後藤 そこで、「実はきょうはね、本田さん、清水の舞台から落ちていただきたいと思って来たんです。一度でいいから落ちていただきたい」「なんでだ」実はこれこれだといったら、頭がいちゃって、「おれの負けだな」とって。

それで5万円。

次に、電通の吉田天皇ともいわれた社長からも5万円いただきました。横道に入っちゃって悪いんですけども、以前統計局におられた山田善二郎さんが、FAOに行ったきり日本に帰らずに、ローマに永住されそうになったのです。その山田さんを日本に帰すために、僕は一面識もない吉田さんを訪ねて行った。そうしたら、8時から御前会議というのをやっている途中だったけれども、「何の用か」と出てこられたんで、「日本にトンプソン・ジャパンという会社があって、そこに斉藤金一郎という標本調査の専門家がいる。いま日本で標本調査の専門家として彼に匹敵する人は、FAOにいる山田善二郎のほかにはいない。ところが彼は、日本ではそういう人を使う仕事がないので、向こうに永住しようということになりそうである。吉田さんのお力で、どこか日本で使ってくれるところを探していただきたいと思って来た」と頼んでみたのです。

そうしたら吉田さんがいうのには、「その人は私のところで一番欲しいんだ。とにかく日本へその人呼び戻せないか。ちょっとでもいいから、帰ったら私が会う。その上



で何とか自分の会社に採用するようにするから、社内の説得には協力してくれ」。そんなことで山田さんは電通に入られたんです。

話を戻しますが、そういういきさつが前にあって、電通の社長に「きょうはお願いに上がったんだ。5万円でも10万円でも出してください」といったら出してくれた。

その2社が出したら、経団連の花村さん（現経団連副会長）もびっくりされて、「あなた方がそれだけの熱意を持ってやるんなら協力しなきゃならない」ということで、それで一生懸命やってくれて、目標額に対して80%くらい集まりました。あの当時としては上々だったようです。

奥野 ああいうものは満額は取れないもんですかね。

後藤 当時は非常におずかしかったです。いまはわかりません。

そして終わった後、経団連から経理の仕方等についてもほめられて、「あなた方のようなやり方をする募金であつたら、今後も協力してあげますよ」といわれたんです。

リポート・コントロールについては、経団連の協力が一番大きい。また、統計制度委員会というのが経団連に設けられていて、それとの関係もよかったです。

リポート・コントロールの問題では、各省の抵抗がずいぶんありました。統計は、各行政機関の行政の縄張りの第一線でしたから、統計で縄張りを壊されたら、他の行政分野でも縄張りを壊されるということで、各省も頑張ったんです。たとえばホーバークラフトというのは、船であるか航空機であるか、その製作について、船舶なら運輸省所管、航空機だと通産省所管。そこで運輸省は船だといって頑張るし、通産省は、ホーバークラフトは

海面より浮き上がるんだから航空機だっていって譲らないんです。

とうとう結論は、条件つきで船ということになったんです。すなわち陸地または陸地に近い海面を発着点として、水面から船底までの高さ5メートル以内で器物を運搬する機械は船、5メートルより高いのは航空機になって、そこで妥結したわけです。

奥野 それは統計に関連して決めたんですか。

後藤 商品分類だったと思うな。分類の基準を定めた。

奥野 統計法をつくったときに、やっぱりいろんな問題が各省の間にあったと思いますが、報調法のときが第2次の山ですね。以後、山はあんまりありませんね。

後藤 以後はそういう大きな山はありませんね。というのは、統計法と統計報告調整法の2つが日本の統計行政の基本法みたいなものでしたからね。

ただ問題は、この法律をつくったときに各省の間でも一番問題になったのは、レポート・コントロール——アメリカの場合はフェデラル・レポート・アクト（連邦報告法）。これに対して日本の場合は、報告調整法じゃなくて、統計報告調整法なんです。ですから、アメリカの場合は、予算局の権限で統計以外のすべてのレポートをコントロールしている。日本の場合は、統計報告ということとで範囲を縛った。各省からの抵抗が強かったですね。

そこで「統計報告の範囲内だ」と、統計に関係のないものはみんな外れてしまうということで、これは経団連がずいぶん抵抗しました。統計にしほらないで、報告全般のコントロールをやるようにということで。しかし行政管理庁としては、そこまではやれないということだった

んです。ただ、統計というのがっているのとついてないのとでは、一体どのくらい範囲が違うか。計量的にはわからなかったんですけども、おそらく5分の1か10分の1くらいしぼられてしまったかもしれないんです。統計報告じゃありませんとって逃げられるようなことをやられると、法律では縛れないわけです。

### 品質管理の導入

奥野 それでは、クオリティー・コントロールのいきさつを伺いましょうか。

後藤 日本でクオリティー・コントロールのことを初めて耳にしたのは、第1次ライス・レポートの中です。第1次ライス・ミッションには、デミングが入っていた。その中にクオリティー・コントロールという言葉がたしか入ってたんです。ただその当時、ライス・レポートを見た人は非常に限られていましたから、後に品質管理をやった人たちも、そのときはほとんど目にとまらなかったとっていいと思います。

ただし、GHQの中のCCS——これはシビリアン・コミュニケーション・サービスにサラソンという、アメリカのGE社員の将校が来た。これが日本の電話の機械を扱っている企業から電話関係の部品の調達をするために、どうしても品質管理を導入せよとしたのです。CCSが音頭をとって、富士通とか日電、東芝等電気通信関係のメーカーを集めて、品質管理の指導をやりました。招かれた人たちの中に日電の小林宏治社長（現会長）とか、第1次南極越冬隊長の西堀栄三郎さん（東芝）とい

った方々がいました。この方々はいずれもクオリティーの問題で戦争中非常に苦勞した人です。西堀さんは、真空管100つくっても検査で1つしか合格しなかったのので、「100発1中」なんていわれて、苦勞された方です。

次いで、昭和24年に日科技連がデミングを呼んで、品質管理のセミナーをやりました。これは一般セミナーとトップマネジメントのセミナーをやって、品質管理についての関心が非常に高まり、昭和25年から日科技連が品質管理のセミナーとして、半年のベーシックコースを開いて指導に当たったんです。そのときの日科技連のセミナーをやった連中というのは、戦争中私が常務理事をやっていた現在の日本科学技術連盟の母体の1つとなった会があるんですが、そこに所属していた者が中心で始めたんです。

奥野 24年のときは統計委員会にいらした？

後藤 24年の7月に東京に出てくる直前、日科技連の品質管理グループ、これは私が戦争中常務理事をやっていたし、水野滋は全日本科学技術統同会の有力なメンバーだった。渡辺英造、井上啓次郎、三浦新等の諸君も、みんな戦争中の生産増強の青年運動をやった仲間です。戦後の日本は、資源エネルギーを持たないから、品質で生きるといふことになって、日科技連を拠点にそれを始めた。いま日科技連は品質管理ばかりやっている。

それで、そのときのデミングさんのセミナーのテキストの印税をデミング博士に差し上げようとしたら、QC普及に役立つように使いなさいと固辞されたので、ありがたくちょうだいして、「デミング賞」をつくったわけです。

それで、第1年目は1951年で、増山元三郎博士と、企業は昭電、田辺製薬、富士製鉄、八幡製鉄の4社が受賞、1952年、第2回目のデミング賞を水野グループの1人として私もいただきました。今日のように日本の工業生産品の品質を高めるためには、日科技連のQC活動が中心でした。ほかに日本規格協会がJIS（日本標準規格）との関係でQCをやりました。

もう一つ、私が統計委員会でQCに関心を持った動機ですが、昭和24年にスイスのベルンで開かれたISIの総会に、大内、美濃部、森田の3人の先生が、GHQのジョーンズさんが占領行政下だったんで団長みたいな形になって、行かれた。ジョーンズはいろいろ先生方に指図したようですね。たとえば、飛行機に乗ったら、中にバーがあっても、あなた方はバーに行って飲んではいけないとかね。(笑)

ベルンでのISI総会において、ISI会長のライス(Dr. Stuart A. Rice)さんが議長でしたが、議事を中断して、「ただいま皆さんにうれしい報告をしたい。日本から3人の友人が着いた」といって、大内先生ら3人を紹介されたのです。

その会議から帰ってこられるとすぐ、私は大内先生と美濃部先生に統計委員会委員長室に呼ばれたんです。何かと思っ て行くと、「君、われわれが予算編成やったときに、品質管理に関する推進のことをいってたね。あのときわれわれは、それは通産省のやることで、統計委員会が関係することじゃないと、君や中原君にいったと思う。ところが、ISIの総会に行ったら、日本ではクオリティー・コントロール、QCはどのような状況になっている

かということも聞かれて、何も答えられなかった。そこでこの次2年後のI S Iの総会の際には、それに関して答えられるように、QCのことを勉強してほしい」ということでした。それでわれわれは大っぴらにQCについて外の会合なんかに出ていくようになったし、いろいろと外からの相談にも乗るようになった。

奥野 しかし、局内では中原さんぐらいでしょう。あとの人はあまり関心なかったような……。

後藤 それで私は中原君呼んで、「君があれだけ強調していたQCが公認された。あなたもひとつやってくれ」といったわけです。

奥野 デミング賞というのは毎年やっていますね。よく種が尽きませんね。

後藤 あれは立候補制度なんです。ただし他薦でもいいし、自薦でもいい。そこでいま大企業の実施賞、中小企業賞、それから事業所賞というのをつくっています。つまり企業が大き過ぎて、ある事業所は一生懸命やっているけれども、全社的には無理だということ。たとえば、石川島播磨の航空宇宙事業本部、三菱重工の神戸造船所等、そういう事業所別にやれるようにしています。いまのところ、日本科学技術連盟のセミナーでは申し込みが多く、断り切れなくなって大変なんです。指導する先生も少ないし。

奥野 いまは事務所というか、たとえば役所の事務の品質管理というものもあるんですか。

後藤 最近、銀行が盛んにやっているんです。銀行は、たとえば帳簿類の書体がある程度均質的にそろってないと、機械が読みにくいという問題が出てくる。そういう

問題があって、銀行ではすいぶん一生懸命やっています。お客さんに対するサービスも一つのフオリティーの問題になるわけです。それから建設業界。いままで技術管理というのは、大量生産における統計的管理でしたから、建築というような一品料理的なものには縁が薄いと思われていたけれども、最近はどうじゃないです。

いまも科学技術庁の人が来ていましたが、先日ロケットの打ち上げを見に種子島へ行きました。打ち上げがときどき失敗しているのです。あの失敗の原因の多くは、アメリカ製の部分の不具合なんです。つまり、どんなに日本製のものが品質がよくても、一緒に組み合わせると一つのシステムになった場合には、中にフオリティーあるいはリライアビリティ（信頼性）の低いものが入っていれば、全体の信頼性を落とすわけですからね。ですから、アメリカ製のものを使っている間は、トラブルは続くだろうと思う。そういう意味では、今度9日に打ち上げるのも、50%はアメリカ製ですからね。

大分県の佐伯市には、商店がショーウィンドーなんかには使う冷凍機で日本最大のシェアを持つ会社があります。その工場全部が一つの流れ作業でつくるシステムになっているんです。そして途中のある重要な部分に、最高の能率を上げるためにアメリカ製の機械を入れたところが、そこだけにトラブルが起きて、全体の生産が落ちてしまう。アメリカから専門の技師が何回も来てテストをするが、「悪いところはどこにもありません」というんです。

私にその会社の人から相談があったので、大分大学工学部の機械工学の先生に見てもらって、その機械に問題があるんだということ立証することをやっています。

奥野 品質管理の成果が日本の工業の発展に非常に大きな影響を……。

後藤 影響しましたね。

日本においては、最初、スタティスティカル・クオリティー・コントロールといったんです。ところがいまはそうじゃなくて、TQC（トータル・クオリティー・コントロール）とっています。それは日本語に訳せば、「全社的品質管理」で、社長から一従業員に至るまで参画する品質管理。これが日本のTQCで、いまアメリカもヨーロッパもこのTQCの考えを日本から逆に入れようとしています。

ところが、外国ではなかなかむずかしい。それは労働者のクオリティーが違うんですよ。労働力が均質でない。アメリカでもそうでしょう。黒人もいるし、プエルトリコ人もいる。ヨーロッパに行けば、ギリシャとかトルコ、ユーゴスラビアの労働者とか、旧植民地の労働者がずいぶん大きな部分を占めていますからね。そうすると、労働力の質がそろってないから、なかなか日本のようにいかない。

もう一つは、労働組合の関係で、欧米では品質改善の技術的な問題については、労働者は一切関知しない。品質改善とか技術の改善は管理者の仕事である、労働者の仕事ではないというわけですね。ところが日本ではそうじゃなくて、われわれ自分のやる仕事なことから、自分が少しでも楽に、そしていい品物ができて、それがよく売れてくれれば、組合の交渉の際にも有利になってくるという点もあるし、そういう問題について職場の中で話し合いをやることは、人間関係をよくする。日本の場合



は、一億同質だからできるんですね。欧米の場合なんかそれは非常にむずかしい。

日本の多くの企業では、勤務時間以外に、いまのQCサークルが組長を中心にやっているわけですよ。それに対して「赤旗」あたりから一時はたたかれたんです。それは勤務に関係していることなだから給料出すべきだという。ところが、やっている人たちは、それがむしろ非常に楽しい、それによって人間関係もよくなる。QCサークルのリーダーには女の人も多いんですけども、そのリーダーが地域のサークル大会で発表するわけですよ。優秀なものは東京で年一回の全国大会で発表をやる。そして、すぐれたQCサークルはアメリカに行って、アメリカの企業の中で、日本ではこういうふうになっているという発表もやる。その資料もたくさんありますけれども、これは外国ではなかなかやれなかった。

とにかくいまアメリカでは品質の競争に負けてしまっている、何とかしなければならぬということになる。品質が悪いのに日本の商品を締め出すことは筋が通らないので、日本の商品の輸入を押しえながら、品質をよくする努力をする以外にないということで、ようやくアメリカでもこのQCサークルがたくさんでき始めています。

(笑)

奥野 デミングさんはまだ生きていらっしゃるんでしょう。何ていっているんでしょうね。

後藤 元気ですよ。この間NBC放送が、日本でやれるのになぜアメリカでやれないかということで全国放送したのを、1時間番組に縮めてNHKが2回放送しています。アメリカではゴールデンアワーにやったので、視聴

率は低かった。しかし、そのビデオカセットに注文が殺到して、全部の申込者に発送するために1月かかった。それほど売れたそうです。

その中にテミングさんが2回出てきます。どこにフィルムがあったのか、モノクロのフィルムで、20年以前にテミングさんが日本で指導しているところや、当時の日科技連の会長、経団連の会長だった石川一郎さんがあらわれてくるんですね。テミングさんがアメリカで指導して成果を上げている例も、長い時間出てきます。

日本では番組の最後の結びの言葉をいわなかったんですけど、アメリカのオリジナルカセットでは、「いままでわれわれは、自分たちよりも子供の代の方がより豊かな生活ができるということを確認してきた、そしてそれは事実であった。しかし、いまやわれわれは、自分たちよりも子供の代の方がより低い水準の生活をしなければならなくなるだろうという問題に直面している」というのが解説者の最後の結論です。

これは結局、日本に追い越されるぞ、もう一つは、資源エネルギーが足りなくなる、日本に見習え、そういうことだと思っただけですが、アメリカで大変な反響だったようです。

私は、このビデオのアメリカと日本と両方見てますけれども、大分へ持って行って、大分でも若い経営者の人たちに両方見せました。QCはアメリカから輸入して、日本で普及して、もう一遍アメリカに帰っているわけですね。

## 統計機械の導入

奥野 関連があるかもしれませんが、コンピュータなどの統計機械の問題について……。

後藤 最初はパンチカード・システム（PCS）。これは私が統計委員会に来たときに、すでに統計委員会がその問題を扱っておりました。戦争中、大阪の造兵廠の大部分は国内のPCSの機械が動員されてたんですが、大阪造兵廠の爆撃で全滅した。だから、敗戦後にそれは各企業に戻らなかつたわけです。それで、どうしてもPCSを新たに導入しなければならないという問題に迫られた。

しかも、PCSは、GHQから統計の整備ということ強く要請されていたので、統計の方から優先的に入れなければならない。企業においても統計部門から入れなければならないということになったので、輸入承認書（LIC）のための書類は通産省に提出されて、統計委員会と経済企画庁を通過した後に初めて承認されるという仕組みになっていたんです。ですから、パンチカード・システム並びにそれに関連する機械については、すべて書類が統計委員会を通過していました。つまり、統計委員会としてのそれに対するリコメンデーションというか、意見をつけることが原則になっていました。ですから、統計委員会のわれわれは、どうしてもPCSについては勉強せざるを得なかつたですね。

そのころIBMやレミントンがどうなったかというところ、戦争中は例の工業所有権戦時法という法律があつて、工業所有権は全部取り上げたわけなんです。戦後、工業所有権戦時法がなくなつたんで、日本IBMが復活し、レミン

トンは吉沢会計機がそれを引き継いで輸入を始めた。したがって、IBMと吉沢会計機と統計委員会とは非常に緊密な連絡をとっていたのです。

さらに、IBMやレミントンの機械がどんどん改善されてきますから、メカニックな問題以外に、その機械を使うためのいわゆるソフト部門の問題も含めた講習会を業者が中心で盛んに行ったんです。それにもわれわれはちよいちよい顔を出していました。

昭和28年ごろ、日本に電子計算機の元祖みたいなもの、ユニバック60と120が入り始めたんです。それは簡易保険局と貯金局が入れました。ところが、これは使い切れなかったんです。というのは、労働組合が反対したわけなんです。それで簡易保険局にしても、かろうじてどこか1地区だけ試みにやった。つまり、人が要らなくなるという問題が出てきますからね。

一方、日本では日電と富士通が、電話のリレーを使った計算機を開発した。その商業製品としての第1号が東京都と統計局に入ったんです。東京都は富士通のもので、リレー式でもFACOMという名がついていました。戦争中アメリカが原爆の開発に使ったのはみんなリレー式だったんです。リレー式の試作機は、内幸町の大蔵省の分館にありました。企業みたいな形で、独立採算でやっていたんです。

しかし、これを使いこなしたのは東京都だけなんです。たとえば「計算するでしょう。その数字が出るとゼロに戻せないんです。写真撮っておいて、次に計算するときは前が何番だったかを見て算出する。そしてまた写真を撮って保存する、そういうやり方でした。東京都はよくあ

れを使いこなしたと思いますよ。統計局の方はリレーの故障が多くて、せっかく入れたけれども、昭和25年の国勢調査には使えなかったんです。

そのころ日本IBMは、矢向音久さんが総務部長で、稲垣早苗さんが総務課長でいました。稲垣さんは後にIBMの社長から会長に、そしていまは名誉会長だと思います。そこに僕は乗り込んでいって、電子計算機をどうして入れないのかということ聞いてみたんです。そして、「アメリカでは研究はやってます」といって、資料はくれたけれども、日本IBMは電子計算機を入れるということは全然いま考えていませんということだったんです。「全然考えていないのはおかしいんじゃないですか。レミントンはずでにアメリカのセンサスビューローで、1950年の人口センサスのためにユニバックIIを使っている。IBMがそれに匹敵するようなものをつくることに関心を持っておられないのはおかしいんじゃないですか」といったら、アメリカでは研究はしているという話だけでした。

奥野 それはいつごろですか。

後藤 昭和27年ごろです。

これは横道に入ってしまうけれども、そのころ富士通の取締役をされていて、後に会長になった高羅芳光さんが私のところへ訪ねてこられて、東芝、日立、日電が電子計算機の開発研究をやっている、ところが自分の会社はFACOMのリレー式のをようやく市場に出したばかりで、その開発の経費を回収しない間に電子計算機の方に移ってしまうと、いままでの開発費が大きな欠損になってしまう、それで踏み切れずにいるというんですね。

そういう問題について、中立的な立場にあって、若干の知識があるのは統計委員会だというふうに聞いたんで、あなたのご意見を聞きに来ましたという。

それで私は、「率直に申し上げますけれども、すぐにお始めにならなければ手おくれになります。リレー式の計算機の元を取り返すなんていって足踏みされていたら手おくれになる」、そういうお話をしたら、その翌年来られて、「あなたのご意見どおり私は主張して、開発研究を進めている」ということでした。そんな時代がありました。

統計委員会も、コンピュータの面では、やはり相当の役割を当時持ったと思いますね。

奥野 それもスタッフとしてはあまりいませんね。道下君がかじっていましたが、ほかにだれかコンピュータのスタッフおりましたか。

後藤 河合さんはかなりの程度のことを知っておられました。というのは、私が行く前は、河合さんがPC Sのことをやっておられたんじゃないでしょうか。ですから、道下君がやったのは、もうちょっと後なんです。道下君の病気が治ってからです。

奥野 そうです。30年以後です。

後藤 「私は病気のために、一緒に入った方々に何年かおくれってしまった」というので、「いまうちが一番弱いのはコンピュータの問題だ」といいましたが、それで道下君がやり始めて、IBM、レミントンなどの業者を対象とする研修に行ってもらいました。

奥野 そのころになりますと、ほかの人は、道下君がやっているからいいやという感じがありましたね。

後藤 道下君は後になって、富士通、日電、日立からく

れって行ってきました。官庁に売り込みするためには道下君を採用するのが有利だということで、相談があったけれども、私も道下君も断ったんです。行けば、さしあたっては優遇されるだろう、しかし、必ず使い捨てにされるから、簡単に行くべきじゃないと思ったからです。

ところが、東芝の社長になったばかりの土光さんから電話がかかってきて、私に会いたいという。「こちらから伺います」といったら、「いや、こちらからお頼みしたいことがあるので行きます」といって私の部屋に来られた。そしていきなり「総理府で手前どもの製品をお使いくださいありがとうございます」といわれるから、「何ですか、何があったんですか」といっていったら、「エレベーターの中のオペレーターの足元にあった電気ストーブが東芝の製品でした」(笑)

そこから話が始まって、用件はとあったら、「おたくにいる道下君をわが社にいたいただきたい。こういうお願いをする以上は、社長がじきじきお願いに行くのが礼儀と思って来たのです。いただく場合には、おたくの方で望まれる条件で採用いたします」ということだった。

それで私は道下君を呼んで、「いつも君に断れ断れといったけれども、きょうは僕の方から逆のことをいうことになった。実は東芝の土光さんが来られて、君をくれ、こちらのいう条件を全部のむといわれている。考える価値があると思う」。

奥野 道下君はそれで東芝に……。

後藤 こちらの出した条件は、単なるスタッフではなく、ラインの課長として採用してくれるならば」ということでした。これで東芝にとっては大変問題だったようです。

というのは、道下君の年齢、職歴に相当する人は、東芝ではラインの課長になっていないというんですね。社内では大変な問題だったんですけども、社長が約束したことだから、採る以外にないんだということ、こちらの条件をのんだわけですね。

それで、道下君には、そういう条件を向こうもの人で行った以上は、5年間はどうなことがあってもやめるということは困る、やめた場合に、ライバル会社に行くことも道義的にいけない、など道下君と話し合い決断したのでした。

ところが、やっぱり会社に入ると、ある意味では使い捨てなんですね。道下君も苦しかったと思います。それで5年たった後に、道下君が僕のところに来て、「東芝をやめることについて相談に来ました、東海大学に行く」という。「それなら私に異存はない。会社がいいというんならよいだろう」ということだったんです。

奥野 よかったですね、東海大学に……。いま水沼君はどんな具合かな、警備保障で……。

後藤 日本警備保障の常務取締役の石崎君が採用したんです。石崎君は同時に、自分がつくった原子力防衛システムの副社長。水沼君は親会社の方ですが、石崎君がいる間は大丈夫ですよ。(笑)

### 各省との関係

奥野 あと機械の問題にも関連しますし、統計委員会の運営とも絡むと思いますが、統計委員会と各省との関係をひっくるめて……。



後藤 機械の問題では、各省の統計の予算は行政管理方の審査を経て、大蔵省に意見書を出す。それについても各省からずいぶん抵抗があったけれども、大蔵省は統計委員会、行管のその方面の専門的な意見をかなり尊重してくれましたから、新しいことを持ち込んでいけば必ず統計委員会事務局、行管はどう考えているか、と意見を聞くし、こちらに対して意見を求めてくるということがありましたから、各省にとってはずいぶんうっとうしいことが多かったと思います。

たとえば、通産省が商業動態調査だったか、設計した予算を大蔵省に出して、行管の方に説明に来たんです。その説明が終わった後、中原君が僕のところに来て、この予算はちょっとおかしいというんですね。つまり、こういう調査をやるためには、どれだけの客体が必要であるか、そのためにはどういう母集団から幾つの標本を取るべきかを決めて、その調査をやるためには幾らの予算がかかるかの計算をして、そして予算要求しなければならぬはずだ、ところがこれは逆だというんですね。

(笑) うその何千万円か取ろうというところからスタートして、すべて逆の計算でやっている、これはおかしいというんですね。

それで私、通産省の人やなんかのいるところで、ちょっとおかしいところを頭に置きながら、幾つかの質問をしたわけです。したら、あそこに統計の専門家が一人いたんです。その日の夕方遅くなって、その人が私と中原君を訪ねてきたんです。そして涙を流さんばかりにして、「大変申しわけないことをいたしました」というんですね。何ですかといったら、「この予算のからくりを課長

や中原さんに見破られたと思いました。それで「おわびに  
来たんです」。サンプリングのデザイナーとして邪道をや  
ったというわけですね。「この調査をやるためにはどうあ  
るべきかということではなくて、予算を取るためという  
ことからスタートしてやった。私としては非常に間違っ  
たことをやったことを見抜かれたので、統計家としては  
全く面目次第もない。これからはあなたや中原さんのい  
うことは何でも聞きますから、「ご勘弁願いたい」。そうい  
ってきたんです。そこで、通産省に対して、根本的に考  
え直しなさい、この調査をするためにはどれだけの標本  
が必要なのか、そこからスタートして予算を考えなけれ  
ば筋が違うと意見を述べて、予算をつくり直させた。

それから、機械については、こちらの意見が非常に厳  
しいものだから、たとえば通産省が初めて電子計算機を  
入れたときは、日電のNEACを入れているんです。と  
ころが通産省は、通産省が電気試験所で開発した機械を  
導入する、商品化されたものを買うんじゃない、だから  
予算をつけてくれということだったんです。それならば  
ということでも認めたのでしたが、機械が入った披露に行  
ったところが、NEACという商品名がついた機械が入  
っているんで、通産省に抗議しました。電気試験所が開  
発した機械だといっていた、どうして日電につくらせる  
ということをいわれなかったかといったことがあります。

それから、統数研がトランジスタを使った電子計算機  
を導入するということで予算要求して、それはいいだろ  
う、どうせ統数研も大きいのを入れる必要があるからと  
いうことで、日立のHITACで予算要求が出てきたの  
で同意したんです。ところが、披露のとき行って、機械

のふたをあけさせた。そうしたら、それはHITACじゃなくて、パラメトロンを使ったHIPAC計算機なんですね。それで統数研を呼んで、「われわれにうそをついたじゃないか。中を見たら、トランジスタじゃなくてパラメトロンで、従来あったものをお入れになっているじゃないか」といったことがありました。

それから、統計局が使っているIBMの701も、いつの間にか新しい機械に変えてしまったんです。それはレンタルで、借料の範囲内で変えてしまってたから、われわれには新しい機種を入れることは一言も相談がなかった。いいものが入ったんだからいいんですけれどもね。そういうこともありました。

奥野 統計基準局はかなり目の上のたんこぶでしたね。  
(笑)

後藤 目の上のたんこぶだけれども、とにかく統計基準局があつたとき県市町村の統計組織を管理していましたから、各省は統計基準局に一目置かざるを得なかったでしょうね。というのは、国勢調査をするにしても、46都道府県は46機の編隊飛行のようなもんなんだ、性能の悪い飛行機や操縦技術の劣っているパイロットが乗っている飛行機があつたら、その編隊の行動半径はそれで制約されてしまう、したがつて、各県の質をどうやってある限界の中に入れておくかということですね。統計基準局としては、奥野さんなどもよく知っておられることだけれども、質をそろえることが重要な問題だったですね。中には愛知県のように、女子職員を80%くらい採用しているところもあるし、そうかと思うと、女子職員が数人しかいない県もあるとか、異動の都度大幅に人を入れかえ

てしまうところもあるし、統計の専門家を相当残しているところもある。質がばらばらだったでしょう。その管理がわれわれとしては一番大変だったと思います。

それから、どれだけ情報伝達の速度が速いか、情報の理解が早いか、テストを意識的にやりました。たとえば、統計基準局の部屋の中で、実害のないことで地方の関心の大きな問題について、私が大きな声で話をする。そうすると、その情報はたちまち各県に広がっていくわけです。そして「こういううわさがあるが本当か」という問い合わせがフィードバックしてくるわけですね。WSPという、ワークス・シンプリフィケーション・プログラムもそれだったんです。

あれ自体は、すぐ役に立ったとは思わないんですが、ただ、各県の意思統一というか、みんなが同じある問題について真剣に取り組んでやってみるということは、いまの編隊の訓練みたいなもんですね。そのためにあれは有益だということをやりました。アメリカ予算局のワークス・シンプリフィケーション・プログラムを各統計課についてやらせてみた。だれが何の仕事も毎日何時間やっているか表につくらせるわけです。各県から、「これだけでも大調査に匹敵する事務量があるのに、何でこんなことを……」ということで大分やられたんです。

しかし、あれが一番役に立ったのは、大蔵省のその次の年の予算査定のときです。というのは、自治省が各県から集めた職員に関する報告の中に、2つの県が統計専任職員ゼロというのが出てきたんです。大蔵省がその書類を持っていて、予算査定のとき、「あなた方の管理はすさんだ。2つの県が統計職員を1人も置かれてない。そ

れで管理されていると思いますか」という。「そんなことは絶対にありません」といって、全県の職員全員のホールソートのカードがっぎ込んでいった。それで「何県にはどういう職員が何人いるかとか、何年以上勤務した職員が何人統計課にいるかとか、何でも質問してください、直ちにこの場でお答えします」というわけですね。そして「何県に」といって、「結構です、わかりました」。

2つの県については、ワークス・シンプリフィケーション・プログラムを見せたんです。主計局はあれを知らないんですね。「これはアメリカの予算局という、おたくに相当する局が、アメリカの行政機関全部にやらせているシステムなんです。これをごらんいただければ、各県の統計課がどういう仕事をやっているか、全部わかります」といったら、「それ以上伺いません、結構です」ということで、こちらの要求どおりやってくれた。そういう点で役立ったんです。

ただし、中原勲平君のその後に出した「やりくり数術」という本には困りました。その本の初版で、「私は統計委員会というところに前に勤めていた。私の上司は数学に対する知識が乏しいから、数式を使ってもらった計画の案を持っていけば、よくわからないから結構だ」といって認めてくれた。その方法で大蔵省主計局に予算要求をやった。」それを主計局が読んだわけですね。この本で「上司」というのは、私と局長の美濃部先生のほかにはいないんだから、(笑) それで中原君に、あれはひどいじゃないかといいましたら、再版のときにそこは訂正しましたようです。

奥野 僕の持っているその本はどっちだろう。(笑) WS

Pは勲平さんですか。

後藤 勲平さんです。出さない県は定員を減らす、あなたの方がこれだけ定員が必要だということがこれで証明されるんだからといってね。

奥野 予算の審査というのは、いまでも続いていますけれども、あれは非常に大きな実際的な力といいますか、そういう力があって、その影響も評価していいんでしょうか。

後藤 いいと思いますね。われわれはスタティスティシャンでしたから、各省のやることでいいことに対しては全面的にバックアップしなければならない。大蔵省とは全然違う立場にあるわけです。こちらは統計をよくするために仕事をやっているわけですから、そういう点では各省の味方になってやった、これは事実です。

もう一つは、各省にとっては痛いことだったかもしれないけれども、大調査の実施はなるべく重ならないようにする。これは統計調査の実査に当たる各県や市町村の能力の問題とも関連してきますから、その調整はかなり大きな役割りだったと私は思いますね。

奥野 石田君はいま企画課長やっていますね。彼は「このごろ大蔵省はますますいうことを聞いてくれるんだ」といっていますね。

後藤 とにかく統計基準局にはスタッフがそろってました。ですから、後から美濃部先生に、あれだけそろっていたスタッフを管理局や監察局や官房に出してしまったのは、私や河合さんの大きな誤りであるとずいぶんいわれました。しかし、美濃部先生そういわれるんなら、それじゃ上田君や奥野君を東京都に呼んだのは……と、こ

っちはいいいなくなつた。(笑)

## 地方統計機構の評価

奥野 地方統計機構というのは、いま僕はこう思っているんですけども、美濃部さんにくっついて東京都に行きました。自治体の仕事を見ていると、いまの統計機構というのは、結局自治体のための機構ではなくて、国のための統計組織である。スタートのときからそうなんですよ。スタートのときはしようがないとしても、いまのままでいいのかという疑問がちょっとあるんです。その辺のところはどうお考えでしょうか。自治体の飯を一時食っていらしたこともあるし。

後藤 スタートはとにかくGHQの命令による仕事をやらなければならぬので、そのために必要な人間は置いてスタートしているわけです。したがって、国本位でスタートしている。それであつたからこそ5000人という定員をつけたと思うんです。あれだけのもつがあつたから、いまはずいぶん減らされましたけれども、これだけの人間を置いていることができる。しかもいま先進諸国の中で、統計専任職員がこれだけ置かれている国というのはないでしょう。これはやはりスタートの段階であれだけの組織を持って、あれだけの人間で、もつがあつたからだと思います。

ただ、当初はもつばら国の用に供するということがあったから、地方公共団体がこれを利用するにはずいぶん大きな制約があつて、地方公共団体としては、その制約はあるけれども、利用したい。私も宮城県の統計主管課

長をやっていたときには、それをやってしかられました。たとえば、住宅センサスの結果の発表の仕方に制限があったんです。住宅の内訳について、専用住宅が何軒、併用住宅が何軒とか、そういう実数を発表してはいけません。発表する場合はパーセントで発表せよと制限されたんですね。私はそうしようかと思ったんだけど、総数がわかっていて、パーセントがわかっているれば、計算すれば実数がすぐ出てくるわけです。(笑) だから記者会見のときに、いわれたとおりパーセントで発表したら、「実数を」というんです。「発表に対して了解が得られないんです」といったら、「それじゃわれわれが計算して発表します」というんですね。(笑)「そういわれるなら、少数点以下をどうされるかによって、新聞によって少し違ってくるかもしれない。計算すれば出てくるから、こちらに計算したのがある」といって、それを見せた。

そうしたら、統計局人口一課長から「調査課長、すぐ出てこい」というわけです。(笑) 行きましたら、人口一課長で後に統計委員会に来られた中山さんが青筋立てて、私に、「一体これはどういうことか。実数をあなた発表されたのか」というんです。「新聞社が計算して出すといいましたから、各新聞がばらばらな数字を出されてはまずい」と思って、数字を見せました」といったら、「あなたは統計局の指定統計の担当者として、それでいいと思うのか」というわけですね。うんと中山さんからしかられました。

奥野 今後どういう方向へ行くべきでしょう。地方の時代とかいわれていますね。

後藤 野放しにしてしまうと、国の委託金が不十分だと



いうことはありますね。超過負担というのが非常に大きくなっている。いまは超過負担で、都道府県、地方自治体の負担は大変大きくなっているわけですから、ある程度は地方公共団体の利用に供せられるような配慮は国としてしなければならないと思います。また現に、そういう努力はかなりやっていると申うんです。その妥協点をどこにするかという問題であって、やはりいまのような形で、できるだけ地方も利用できるような協力を国がしていく以外にないんじゃないでしょうか。

ただ、いまの委託費制度というものが、何か中途半端な形であることは間違いありません、県の負担が非常に大きいですから。だから、県としては超過負担しているんだから、県が利用するのは当然だという感じが強くなってきていると思います。

## ISIと国際条約

奥野 ISIについて何遍かお触れになりましたけれども、何か特に東京大会に関連してでもございますか。

後藤 東京大会というのは、ISIの総会の歴史の上では最も華やかな、というより最も盛大な大会であったことは間違いありません。最近の総会については、出席していないのでわかりませんが、とにかく開会式はNHKホールでやって、NHK交響楽団が全員で、越天楽とワグナーの大学祝典序曲を演奏したのですからね。ああいうことは外国ではないです。ISIの規約によると、開催国の元首が会議を統裁することになっており、日本のときは皇太子殿下にお願いをいたしました。

そこで、私が「先導役をすることになって、何回もリハーサルをやったのです。

ところが、開会式が終わって、スタジオでもあるNHKホールをご退場になるとき、ドアがあかない。リハーサルのときはNHKの人がドアをあけてくれていたので、普通のハンドルと違うということを知らなかつたんです。それで、いざ殿下をご先導しようと思ってドアをあけようとしたら、どうしてもあかない。侍従長が飛んできて一生懸命やるけれどもあかない。警察の護衛の人がやってもあかない。それで3人で「ぎゅうぎゅうやって、ハンドルを90度回したらカチンと行ってあいたんです。

こっちはすっかり上がってしまって、まっすぐ行かなくやならぬところを階段を降りようとして、途中で考えて「間違えました」といって。(笑) したら殿下が車にお乗りになるときに「後藤さん、ご苦労さまでした」といわれたんです。(笑)

その後、ISIのトレジャリーをやっていたコッフス女史から私あてに来たお礼の手紙に、「ISIの総会は、とびらが開かないことによって開かれた」(笑)とありました。コッフスさんからは、その後もクリスマスカードをいただいていた。大会の設営と運営はずいぶん一生懸命やりましたからね。一生のよい思い出です。

奥野 あの前にかフェの統計会議を東京のサンケイホールでやったんですね。あれはISIの準備としてやるんだということ。僕はそのときはいましたけれども、ISIのときは愛知県にいたもんで……。

後藤 その前、昭和25年にライスさんと国連のレナードさんが統計の改善のため日本に来ているんです。それは

ISIの総会の10年も前のことです。そのときのことも私は非常に印象的で、ちょっといままで触れてなかった問題だけれども、経済統計に関する国際条約のことです。これは、いまの統計制度にかなり関係深い問題なんです。経済統計に関する国際条約は、昭和3年12月14日にジュネーブで調印された条約です。経済統計について、当時国連に加入している国々は、以後この条約によって行うということで、各統計の作成の基準を決めている。それで日本もその国際会議に参加して、国際連盟日本事務局長の伊藤述史さんが日本を代表してその条約に署名しているのです。

ところが、署名して間もなく満州事変が起きて、日本はその条約の批准ができなくなりました。というのは、満州が中国の一部ということにその条約ではなっている。ところが、日本は満州を独立国として承認する方針をとったために、批准をしようとしたけれども、批准ができなのまま、支那事変から太平洋戦争に入ってしまい、終戦になったわけです。

そこで、サンフランシスコの対日講和条約の締結に当たって、本文の後に、「すべての権利義務の復活」という宣言文が加えられ、「本日調印された条約について、次の宣言を行う。日本政府は講和発効後6ヵ月以内に、次の諸条約取り決めに正式に加入する意図を有する」という宣言ですね。そして調印したまま批准しなかった条約がずっと列記され、その3番目に「経済統計に関する国際条約並びにその付属議定書」というのがある。

付属議定書というのは、戦後につくられたものです。なぜかという、国際連盟というのがなくなって国際連

合になったので、国際連盟を国際連合に肩がわりする、それを決めたのが付属議定書でした。日本はこの条約の批准をして、昭和27年の12月4日から効力が発したわけです。

そこで、その後に行われた国勢調査、農業センサス、工業調査、商業調査等は、経済統計に関する国際条約に基づいて行われるセンサスとなったのです。

昭和25年にライスさんとレナードさんが来られたときに、私は、日本がこれに正式に加入した場合には、この条約は20年以上も日本は批准しなかったのだから、条約どおりにするということになる、さかのぼって何かやらなきゃならなくなるのかという質問をしました。そしてレナードさんは、それはそうではなく、その条約が効力を発生したときから、その条約に基づいて行えばいいんだということ、われわれとしてはほっとしたわけです。

たとえば、昭和25年の国勢調査がそれだということになると、手続上大変繁雑になる。したがって、いまもその条約に基づいて統計の国際協力が行われ、そしてそれを主管するのが国連の統計局です。

ちょっと戻りますけれども、レポート・コントロールの制度は、アメリカの場合は、10年以上同じフォームで調製する報告は、全部フェデラル・レポート・アクト(連邦報告法)の適用を受けることになっています。当時、経団連——そのころ日産協(日本産業協議会)といっていました、それが統計の重複状況の調査をやったんです。会員の540社中81社を対象として調査を行って、その重複状況を調べたデータで、レポート・コントロールにつ

いて日産協として積極的にやってほしいという雰囲気が出てきたんです。

フェデラル・リポート・アクトで論議された点というのがここに1つ書いてある。「この法律は、政府が政府部内に対して義務を課し、国民に対して義務を課すものではない、その点がこの法律の一番論議された点だ」と書いてある。立法の精神はアメリカの場合と同じだけれども、日本は統計に限定されている。

違反に対して中止または変更を求める行管長官の権限はどうかということ、違反に対する罰則がないのです。それに対して、われわれのとった態度は、内閣法第8条による中止権の発動というのがあります。「内閣総理大臣は、行政各部の処分又は命令を中止せしめ、内閣の処置を待つことができる」という条文があるんです。国会でも、もし各省がどうしてもいうことを聞かない場合はどうするかということについては、「中止権を発動する」という答弁をしたと思います。

奥野 I S I それ自体について、いままであまりお話しになっておられませんが、特にI S Iの委員のことについて何か……。

後藤 I S Iの創立は1885年ですが、第1回の国際統計会議が1853年にケトレーの提唱でブリュッセルで開かれました。それは、ケトレーがベルギーの中央統計局長やっていたときです。そして第8回の1872年(明治5年)のペテルスブルグ、いまのレニングラードの総会に、日本からモーリス・ブロックに伴われて初めて8名か9名の代表を出したということなんです。

奥野 この前美濃部さんにインタビューしたとき、「I S

Iの委員おやめになつたでしょう」といったら、「やめた」「日本統計学会の会員もおやめになりましたね」といったら、「やめた」「何でやめたんです、もったいないですね」といったら、「それはもう君、出たつて役に立たないよ」ということでやめたそうです。ISIの方は大分前ですね。日本統計学会はことしかな。いまは個人会員は美濃部先生以外に森田先生とか、どんな人なんでしょうね。

後藤 個人会員は、ずいぶんふえています。

奥野 一ころは大内先生だけみたいでしたか。

後藤 20名以上でしょう。とても多い。私の知らない方もたくさん入ってますし、ここに名簿がありますが、ジャパンは60~70人います。

美濃部先生、確かに入っておられないな。

### 吉田 茂さんとの会談

奥野 何かにお書きになっていることで、吉田茂さんと会談なさったそうですが、何でお会いになつたかということが書いてないんですよ、話された内容はありますけれども。

後藤 私が統計委員会にいたころから、戦後の日本の統計の再建は吉田さんの努力に負うところが大きいんだという話をしばしば大内先生から伺っていました。吉田さんの意向によつて、「統計制度改善に関する委員会」が内閣に設けられたことも聞いていたので、そのころの事情を吉田さんから直接聞きたいと思ったんです。

それで、吉田さんにお目にかかりたいという申し入れをしたわけです。昭和38年5月6日の16時と指定されて、

大磯のお宅に行っただけです。

奥野 特別なあれもなかったんですか。吉田さんに会うのは容易じゃないだろうと思われるんですが、基準局長ということまで話をなさったら……。

後藤 それは私はちょっと吉田家と関係があるもんですから。というのは、当時の吉田総理の娘の麻生和子さん、あのご主人の麻生太賀吉君、私のいとこなんです。だから、それ以前にも大磯のお宅には行ったことがありました。吉田さんの家の門を入ると、とたんに犬がキャンキャンほえる。それがワンマン、ワンマンとほえているように聞こえて……。 (笑)

それで吉田先生に会って、当時の事情を聞いたわけです。そして、外務大臣のときに呼ばれてGHQに行ったら、マッカーサーが「日本の統計は不正確だ、ことにグリーン（穀物）の統計が非常に不正確である」という。吉田さんは、食糧の放出を要求して、お米が非常に足りなくて、日本人は餓死するかもしれない、何とか食糧を放出してくれと嘆願されたそうです。その翌年総理になられたのですが、マッカーサーに呼ばれてGHQに行くと、マッカーサーは、「グリーンが足りないとあなたは言ったが、あなたのいった数量の10分の1くらいしか放出してないけれど、日本人は餓死してないじゃないか。日本の統計はこんなに不正確なのか」といわれた。

そこで吉田さんは、「確かにあなたのいうように日本の統計は非常に悪い。もし日本の統計がよかったならば、アメリカと戦争をしなかっただろう。仮に戦争を始めたとしても、日本の統計がよかったならば、負けないうちに戦争をやめていただろう」と答えた。それならマッカ

一サーも笑いながら、「統計をしっかりとやりなさい」といったということでした。

そこで、統計をしっかりとしなければ占領軍が日本を信用してくれないと思ったので、NHKの会長室に大内先生の恩師である高野岩三郎先生を訪問した。高野岩三郎先生に統計の再建について協力をしてほしいとお願いしたところが、高野先生は、「自分はもう年も取っているので、とてもその任には適当ではない」といって、2人の門人に協力させようといわれた。その1人が大内先生であり、もう1人がその後GHQ顧問になられた九大の高橋正雄先生、この2人でした。

そこで吉田総理は大内さんと呼んで、日本の統計の再建に協力してほしいということも頼んで、「統計制度改善に関する委員会」の設置について閣議で決めて、大内先生を中心に運営するようになった。一方高橋先生の方は、GHQの経済科学局で日本の統計の再建に協力されることになったのです。

奥野 お書きになったものによると、初めに吉田さんがマッカーサーに会ったときにこういわれて、1年後また会っていわれた、それで統計制度の再建が始まったと書いてあるんですね。それを読んで、おかしいな、総理大臣になってすぐに統計制度の再建が始まったはずなのにと思った。初めは外務大臣なんですね。

後藤 その点、前のが不正確だったんでしょう。きっとそうだと思います。

奥野 内容はそれでいいと思います。どういういきさつで大磯に行かれたのか、それがよくわからなかったのですね。

後藤 余談ですが、もう一つ。吉田さんの家に行くアポ



イントメントをとって、行くことが決まっているときに、岩手県の統計課長が来て、「統計岩手」という月刊の機関紙を出している、その題字を佐藤総理に書いてもらいたい、あなたに頼めばそんなことくらいはおやすいことだろうって言うから、「おやすいご用といわれても、そんな簡単なことじゃない。佐藤総理のはもらえないけれども、吉田さんのなら書いてもらえるかもしれませんね」といったんです。

そしたら、「あなた、それ本気でいうのか」というんですね。冗談をいって、からかわれているんだと思ったらいいんです。そこで、「それは私はそう思うんですが」といったら、「あなたか吉田元総理の題字をもらえると思うなら取ってください」。やれるならやってみろ……。笑

それからこっちも意地になって、吉田総理のところに行つたときに、「実は私の親しい友達から『統計岩手』という字をぜひ書いてほしいといわれたんですが」といって、「ああ、おやすいご用です。書いて1週間以内に送ってあげます」といって、1週間たたないうちに「統計岩手」と書いたのを送っていただきました。

それを岩手県の統計課長さんに渡した。そしたら統計課長はびっくりしましたよ。だれの字とも断らないで使つたのです。それを岩手県統計大会の席上で私がしゃべつたので、統計課長さん、とても困つたんです。だれも吉田さんの字だつていうのを知らなかつたんです。

奥野 それ、いまも続いているんですか。

後藤 続いてません。「統計岩手」が縦組みから横組みになったときに、それは使わないことになったんです。すつと後の話ですが。

後藤 さっきの補足で、ジュネーブで「経済統計に関する国際条約」が調印されたのは、1928年（昭和3年）12月14日、それで対日講和条約が効力を発生したのが昭和27年12月4日。ですから、24年ぶりですね。

### 杉 亨二先生のこと

奥野 いろいろお伺いすることがたくさんあると思いますが、あと、お気づきの点で、これはぜひ入れておいた方がいいというのがございましたら、ペラをごらんいただくときに……。

後藤 戦前の日本の統計のことでも、たとえば例の杉亨二先生、あのころのことはどなたか……。

つまり、私が今後何か記録を残しておきたいことは、杉亨二先生は、福山10万石幕府の老中の阿部伊勢守のところで統計の勉強をされていたんです。勝海舟も一緒だったと思います。阿部伊勢守の推薦で、幕府の開成所の教授をされていたのです。ところが、山岡鉄舟が駿河の国の人口を把握しようとして、沼津奉行の阿部国之助という人の協力によって、「駿河の国人別調べ」を実施しました。杉亨二先生がこれを企画されています。これは西洋流のセンサスでは日本で一番最初のものだったでしょう。山岡鉄舟は勝海舟と相談をして、杉亨二先生の協力を求めたとされています。

この調査で調査員の仕事を担当したのが、名主すなわち庄屋さんでしたが、名主を動員したのが清水次郎長（本名山本長五郎）でした。しかし、そのときは明治2年で、

明治政府ができていたので、この種の調査は明治政府の指示のもとにやらなければおかしいという意見が出てきたために、集計されないままに終わっています。

その後明治12年になって、杉亨二先生が太政官の政表課長として、甲斐の国（山梨県）人別調べをやっています。これは明治政府による将来の国勢調査のためのパイロット調査のような役割りを果たすものでした。

そして明治33年（1900年）、第11回の人口センサスがアメリカで行われたときに、当時の農商務省統計課長の吳文聡という人がそれを視察して帰国すると、国勢調査を行うべきであるという建白書を政府に出しています。

その建白書に基づいて、明治38年に最初の国勢調査が行われることになったのですが、日露戦争のために無期延期になった。そして、大正9年によく国勢調査が行われています。しかし、国勢調査に情熱を燃やした杉亨二先生は大正6年に亡くなっており、染井の墓地にお墓があります。

この国勢調査を転機として、日本の統計の整備が進められました。中央統計委員会ができたのはその直後でした。

奥野 大正9年10月末ですね。去年でちょうど60年、還暦ですね。大正9年から勘定して、去年の国勢調査が60年目ですね。そして去年全統連が30年目を迎えていますから、全統連ができたのは60年の中間なんですね。昭和25年以前の30年と以後の30年では、ずいぶん感じが違いますけれどもね。(笑)

後藤 杉先生は、大正6年の12月4日に亡くなっているんです。学士院会員、法学博士。

杉先生は長崎の方で、長崎市の長崎公園に胸像があります。私はそれを見てきました。少し話は戻りますが、勝海舟の屋敷にいて、それから、老中の阿部伊勢守正弘の福山藩邸におられたんです。安政4年に蕃書調所教授、それが開成所のことですが、そこにおられた。沼津に移住されてからは、徳川家教授という肩書きになっています。明治2年にさっきの駿河の人別調べ。

### その他

後藤 私、よく統計大会なんかで話したんだけれども、第1回の国勢調査で都々逸みたいな標語が町に張られた。京都府の統計課に行ったときに、京都府の倉庫の中にそれが残っていたんです。

それは、戸籍上妻になっていなくても、内縁の妻も「妻」として申告することになっていたんですね。それをPRするためにポスターで「籍に入らぬこの身も妻で通るうれしいこの調査」それから「世間晴れての夫婦じゃないが粹な調査が妻とした」そういうポスターがあったんです。

奥野 ちゃんとポスター刷ってあるんですか。

後藤 刷ってある。僕が見たのは、刷った現物が写真であつたか、とにかくそういうポスターはこれだというのを見ました。京都府庁にありました。それは、ずっと昔農林省から京都に行った方を訪ねて行ったときに、そのポスターがあるというので、それを見たいといったら見せてくれたんです。

奥野 いまもやればいいんですよ、国勢調査のポスタ

一を。

後藤 いま立命館大学の先生をされている足利先生の本の中には、第1回の国勢調査のときに、調査員が紋付羽織はかまに威儀を正して各世帯を訪問した。その世帯のご主人も紋付はかまに威儀を正して出迎えて、お座敷に通した。やがてうやうやしくお三方の上に調査票を載せて持ってきて、「明治大帝のお定めになった法律に基づいて行われるこの調査に協力できることは、光栄の至りに存じます」といって、調査票を出したという話。(笑)

それから、調査票を5~6枚調査員が汚してしまって、その責任を感じて自殺しようとして、みんなにとめられたことがあった。そんなことが出ていたことがあります。ですから、第1回の国勢調査というのは大変なことだったと思うんです。

奥野 あのと、市町村もずいぶん金を出したんですね、国も出しましたけれど。

後藤 あれだけ現住地主義の調査だったから、旅行者はみんな自分の現住地に帰ったという話です。本当に国としては画期的なことで、日本の近代化のためにはずいぶん大きな役割を担った調査だったことを証明するわけです。

勲章に準じて、こうしてぶら下げる国勢調査の記念記章というのがあった。

奥野 この前、京成デパートの古物の市がありまして見ました。何万円だったかな。僕、赤本——「調査員の手引き」を書いたときは950円だったんです。

後藤 僕も持っているんです、それを。何万円の価値がある。

奥野 5~6万円しました。

後藤 私の父が当時内務省にいてもらったのがあるんです。買ったわけじゃないんですけれども。

奥野 やっぱりときどき古道具屋に出ます。いま5~6万円払う気はしないですけれども。

後藤 ちゃちな黒っぽい銅のメダルですからね。

美濃部先生からいろいろお話をお聞きになったでしょうが、私も統計委員会、統計基準局ではずいぶんいろんなことをさせていただいたけれども、美濃部先生がおられなかったら、とても私はやれなかったと思いますね。それから、河合さんというアシスタントがおられなかったら、僕もとても勤まらなかったと思いますね。とにかく私の仕事の大部分は河合さんがやってくださったし、河合さんと私とは意見が一致していた。美濃部先生は、「意見が違っていても、君たちがそういうならそうしよう」といって妥協してくださったんです。そしてそこには大内先生がおられた。あの人間関係というものは、やはり日本の統計の再建の中では一番大きなバックボーンだったと思いますね。美濃部教室なんていわれたけれども、とにかくそこに有能なスタッフが集まってきていた。

後藤 もう一つは、統計局と統計基準局の関係、これも歴史の古い役所と歴史の浅い役所でしたから、いろいろ問題はありました。

森田先生が、統計局にある長い歴史を持っている日本統計協会を育ててこられた。全統連とはある意味ではむずかしい関係にあったけれども、その森田先生が全統連の会長になられて、現在ようやくその問題は新しい段階

に入ったという感じもしますね。

統計局と統計基準局を合併しようという動きもあった。これは福田篤泰さんが大臣のときです。福田篤泰さんはISI総会のときの総理府総務長官ですね。ISIは行管の新管だったでしょう。そして益谷副総理が行管長管で、ISI総会の実行委員長みたいな形だったんです。ところが、福田篤泰さんは、「行管は総理府の外局で、総理府の長は総務長官だ。副総理かもしれないけれども、外局の長は私の指揮下にあるんだから、ISIの総会のときの開会の辞は私が述べるんだ」というんです。

それで困って、益谷さんのところに相談に行ったんです。そしたら秘書官の辻トシ子さんが、「福田さんがそういうなら、うちのおじいちゃんに泣いてもらおう」。泣いてもらおうということで、開会の辞は福田さんが述べて、益谷さんはISIの東京総会の運営委員長かな、別の肩書きであいさつされました。

その福田さんが後になって行管長官になって来られて、統計局と統計基準局は統合すべきだということを盛んに主張されました。しかし、政府の統計データセンターをつくり、統計機械の集中管理をやって、どこの省でも一つのシステムとしてデータの交流ができるようにしようという案をつくったところ、長官はこれに大変関心を持たれた。

ところが、各省の統計機械がみんな違うので、コンバーターが必要なわけです。それに、まだタイムシェアリングのコンピューターがアメリカで作り始められたばかりのころでした。タイムシェアリングの機械をセンターに置いて、各省と連動させるシステムをやるべきだと

いう意見に福田さんは大乗り気で、それをやれやれという。

私は10年早いと思っただけけれども、(笑) とにかくそれを一生懸命やっただです。今日ようやくそういう方向に向かってきているでしょう。だから最近、行管の人から、「あなたが考えておられたあのときの構想、あれがまた10年月にもう一回日の目を見るようになりましたね」ってよくいわれます。

奥野 いまは両方とも専門家がいなくなりましたね。統計局もないんですって。困ってますね。行管もいなくなっている。

後藤 だから、それができる人なら、中央統計局という全く新しいものをつくるという形。われわれも、それなら当時も異存はなかったんですよ。いわゆる会社だったら、設立合併ならいいけれども、吸収合併は嫌だったわけです。(笑) しかし、表向きそうはいえないしね。

奥野 僕も臨時行政調査会に行かされて、変な合併の答案が出ると困るもんですから、かなり……。

後藤 また今度何かやるかもしれないですよ、第2次臨時行政調査会で。

奥野 統計主幹という形になっていますからね。

後藤 行管の歴代の長官がみんな行政改革、行政改革というけれども、だれもあまりやれませんね。竜頭蛇尾に終わっています。

奥野 あれはやっぱり総理大臣でしょう。その気になって蛮勇を振るわないと。

後藤 行管がある程度仕事をやった時期が何回かありますけれども、長官が非常に政治力のある人だったときに、



仕事をやっているんですね。だから、河合さんが次官になられた当時は福田さんのときで、いろいろやれた。行管は権限がないですから、人次第です。いまの長官がどれだけやれるか。

奥野 佐倉君が腕を振るところですよ。

後藤 しかし、「まず隗より始めよ」で、自分のところをやらなきやとやられるので、それが一番嫌ですね。ことしも、四国管区の行政監察局の廃止で何とかお茶を濁したということでしょうね。

奥野 どうも長時間、大変ありがとうございました。

## 後藤正夫氏略歴

	大正	2	(1913). 6. 18		横浜市に生まれる(本籍大分市)
	昭和	12	(1937). 3.		横浜高工卒業
		12	(1937). 4.		三菱鉦業技師
		18	(1943). 5		内閣技術院嘱託
		19	(1944). 5		内閣技術院参技官
		20	(1945). 9		内閣調査局調査官
		21	(1946). 1. 18		宮城県知事官房秘書課長
		"	"	2. 1	宮城県内務部調査課長
					兼知事官房秘書課長
		24	(1949). 7. 5		統計委員会事務局基準課長
		25	(1950). 1. 31		同上 審査第二課長
		27	(1952). 8. 1		行政管理方統計基準部企画課長
		"	"	11. 22	1952年度"ミニング"賞受賞
		32	(1957). 8. 1		行政管理方統計基準局企画課長
		34	(1959). 1. 30		同上 局長
		42	(1967). 5. 1		同上 退職
		43	(1968). 1. 27		大分大学学長
		51	(1976). 1. 27		同上 退職
		"	"	2.	大分大学名誉教授
		"	"		東海大学客員教授
		"	"	9.	参議院議員
		53	(1978).		日本オペレーションズリサーチ学会賞受賞
		55	(1980). 7.		参議院議員再選